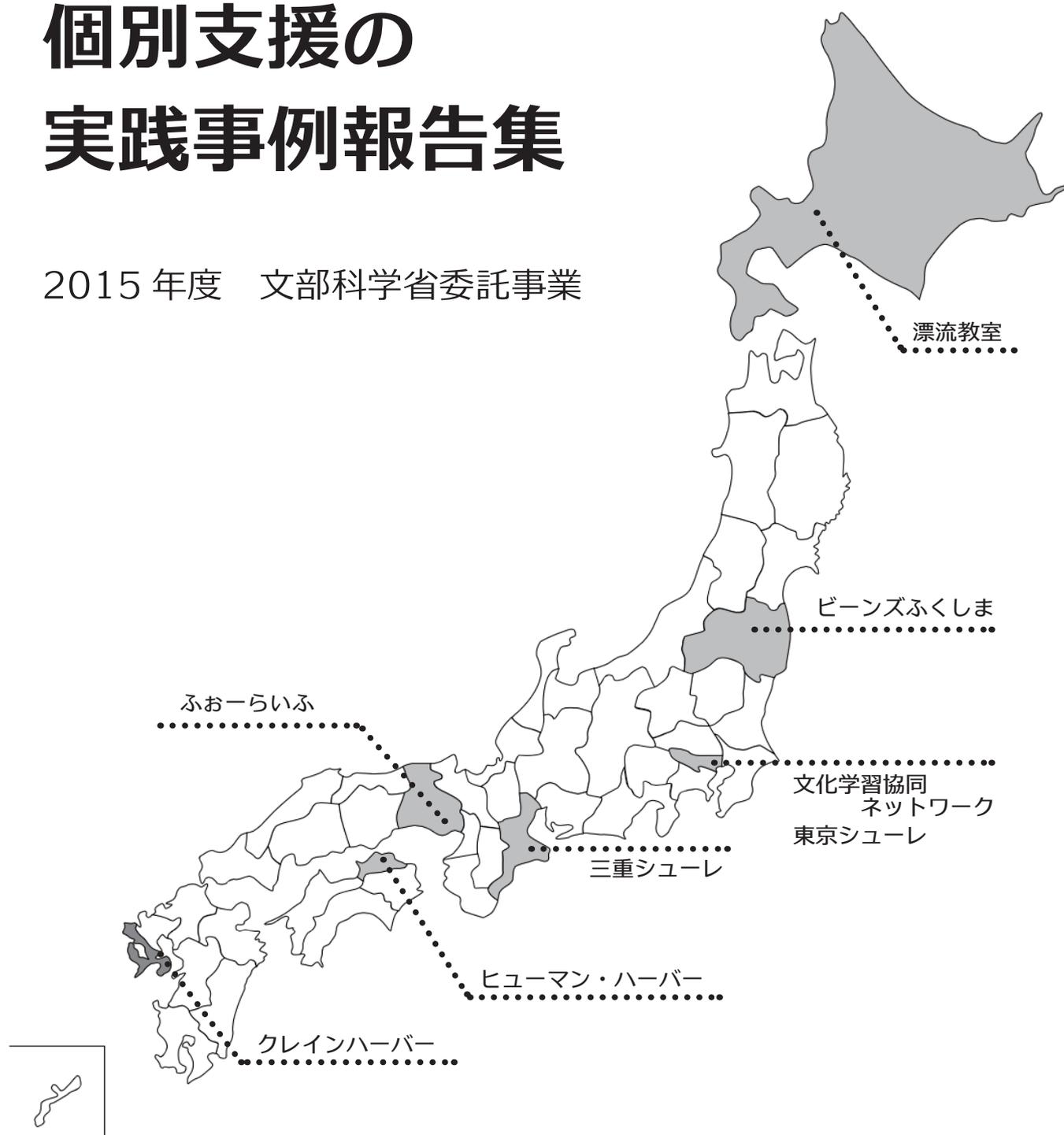


フリースクール等における 在宅支援を含めた 個別支援の 実践事例報告集

2015年度 文部科学省委託事業



NPO 法人フリースクール全国ネットワーク

フリースクール等における 在宅支援を含めた個別支援の 実践事例報告集

>>もくじ

はじめに	3
クレインハーバー（長崎県）	4
ヒューマン・ハーバー（香川県）	10
ふおーらいふ（兵庫県）	15
三重シューレ（三重県）	19
文化学習協同ネットワーク（東京都）	24
東京シューレ（東京都）	29
ビーンズふくしま（福島県）	34
訪問型フリースクール漂流教室（北海道）	39
フリースクールはどんなところか～それぞれの実践から 奥地圭子.....	44
フリースクール全国ネットワーク団体一覧	48

はじめに

1980年代、日本国内において「不登校」が学校教育の課題として取り上げられるようになり30年余りの時が経ちました。文部科学省は1991年に、それまで特定の個人の気質、疾病等の課題ととらえていた不登校への認識を「誰にでも起こりうるもの」と転換し、その認識に基づき、誰もが安心して通える学校づくりに向けてスクールカウンセラー（1994年）、スクールソーシャルワーカー（2008年）の導入、あるいは教育支援センター（適応指導教室）の設置など様々な対策を行ってきましたが、2015年現在、不登校の子ども数は小中学生で約12万2千人、高校生で約5万5千人と高止まりを続けています。

そのような状況の現在、フリースクール等の多様な学びの場が注目されています。これまで学校教育法で規定する「学校」に限られていた子どもたちの学ぶ権利の保障を、学校外の場で学ぶ子どもたちにも保障していこうという議論が、政府でも、超党派の議員連盟でも進んでおり、その「学校外の学びの場」のひとつとして、フリースクール等にも大きな期待が寄せられているのです。

日本におけるフリースクールの歴史は1980年代半ばから、不登校の子どもを持つ保護者たちが自主的に立ち上げた場もあれば、海外のオルタナティブ教育の思想を取り入れてスタートした場、あるいは不登校の経験者が自ら作り上げた場などもあり、全国に約500箇所あると言われています。うちフリースクール全国ネットワークには2016年1月時点で81団体が加盟、通いの場だけでなくホームデュケーションの支援も行う団体や訪問支援の活動をする団体もあり、多様な形態で学びの支援を行っています。

活動内容自体はそれぞれ独自性を持って行っていますが、子どもひとりひとりのニーズに合わせた学びと成長の支援を行っていること、一般の学校のように決められたカリキュラムをこなすのではなく、子ども自身の興味や関心に基づいて講座をつくり、子ども自身がそこへ参加するかしないかを決めていくスタイルをとっているフリースクールが大半をしめています。

本書では、それぞれ独自の活動を行う各地のフリースクール等の実践を、それぞれの場のメンバーひとりに焦点を当てたストーリーを通じて紹介し、そこから「フリースクール等の何が子どもの学びや成長を支えたのか」、「多様性の中にある大切な共通点、理念とはいったい何か」を探っていく試みに挑戦しました。

学校外の場で子どもの学ぶ権利を保障しようという時、「フリースクールといっても玉石混淆、本当にそこで子どもの学ぶ権利を保障できるのか?」、「法律の枠組みの中に入る事は、同時にフリースクールの独自性が失われることも意味するのではないのか?」という不安の声も聞こえてきます。その様な不安を払しょくし、それぞれの場の多様性を堅持しつつも活動の質を高めていくため、フリースクール等の現場で働く皆様はもちろん、教育行政、学校関係の皆様、これから子どもの教育、学びの支援に関わる皆様にお読みいただき、フリースクールをより知っていただくとともに、相互の学び合いの一助としていただければ幸いです。

NPO 法人フリースクール全国ネットワーク

クレーンハーバー Crane Harbor



【団体名】 クレーンハーバー

【活動地域】 長崎県長崎市

【会員数】 9名

【スタッフ数】 常勤2名・非常勤1名・ボランティアスタッフ5名

【活動理念】

NPO法人フリースクールクレーンハーバーは、不登校の子どもたちに『居場所』を提供することを目的に、平成16年から長崎市内で活動し今年で12年目になります。

小学1年生から20歳までの子どもを対象にしていますが、20歳を超えても学習支援や就労支援を受けながら継続して通える体制を作り、社会との繋がりが切れないよう心掛けています。

現在は15歳から24歳までの9名の子どもが通い、スタッフは常勤2名・非常勤1名・ボランティアスタッフ2名の計5名が支援に携わっています。

「何らかの理由により学校へ行けなくなった子どもでも、その個性や能力を伸ばし活かすことで、自立した生活を送れるとともに、社会貢献することができる」です。

【活動の特徴】

活動の特徴は野外活動が多く、農業をはじめ陶芸・木工・ボランティアなど様々です。

身体を動かすことが多いので、体力がつきます！ もちろん参加・不参加は子どもたちの自由ですが、ほとんどの子どもが参加し積極的に作業に取り組んでくれるので、先方からも頼りにされる存在となっています。時にはきつい作業もありますが、仲間と協力し共に汗を流し誰かに「ありがとう」と言ってもらえる事は、子どもたちが喜びや達成感を得られる大切な機会でもあります。

こうした活動を通して子どもたちは少しずつ自信を取り戻し、自己肯定感を高め次のステップへと踏み出していきます。学校へ行っていないから社会へ出て通用しないということは決してありません。フリースクールでも勉強はできます。スポーツもできます。社会性も十分に身に付きます。

卒業していった子どもたちがその証です。

コミュニケーションがとれなかった、Sちゃんの例

今回はその中の1人、Sちゃんについてお話ししたいと思います。

彼女と初めて会ったのは9年前。彼女は当時12歳(中1)。私はフリースクールのスタッフになってまだ1年も経たない頃でした。彼女は家庭の事情で両親の元を離れ祖父母の家で暮らしており、初めてフリースクールへ来た時もお祖父さん・お祖母さんがご一緒でした。

フリースクールを知るきっかけはご家庭により様々ですが、彼女の場合はお祖母さんが不登校になった孫がせめて外に出られるようにと自分で調べられて、辿り着いたそうです。

公立中学校には行かず私立の中学校に通っていた彼女。小学校の時にも5ヶ月ほど不登校になり、とにかく小学校の知り合いと離れたいという気持ちから私立へ進んだそうです。でも結局新しい環境にも馴染めず中学校でも不登校になってしまいます。

そもそも彼女が不登校になったのは、同年代の子と上手にコミュニケーションが取れずに避けられるようになってしまったことがきっかけだったそうです。

確かに当時の彼女は人とコミュニケーションを上手に取れる子ではありませんでした。

学校でも浮いてしまうだろうと容易に想像できましたし、とにかく当時のSちゃんはハチャメチャで私にとって理解不能な存在でした。

具体的に例を挙げると

- ・ 結界を張る
- ・ 訳が分からないことを言って突然外へ飛び出す
- ・ 団体行動中にいなくなる

といったところでしょうか。

私はフリースクールの支援に携わり10年目になりますが、これまでに結界を張った子どもを彼女以外に知りません！ それ程レアな存在の彼女を、スタッフになって間もない当時の私が理解できるはずありませんでした。きっと周りの子どもたちも口には出さなくても、引いていたと思

います。

でも決して彼女のことを否定したり仲間外れにしたりせず、ありのままを受け入れてくれるのが、ここに通ってきている子どもたちの素晴らしいところですよ。

それはきっと自分たちも同じようにここでありのままの自分を受け入れてもらい、この居場所を大切にしたいという思いからなのではないかと私は思っています。その思いがここに来る子どもたちには伝わっているようで、今まで一度も「いじめ」というような問題が起きた事はありません。これは今後も大切にしていきたいことのひとつです。

Sちゃんもみんなに受け入れてもらっているという安心感があったと思います。ただその安心感が彼女の行動をエスカレートさせてしまっていたのかもしれない。

トラブルがきっかけで本当の「居場所」に

ある日彼女は活動中に失踪事件を起こします。

その日は野外活動で、いつもお世話になっている陶芸の窯元さんのお宅へお邪魔していました。ここは山に囲まれた自然豊かな場所で、冬には雪も積もったりします。窯元さんのお宅以外に民家はなく、人よりイノシシの方がたくさん住んでいる様な所です。そんな山の中で、Sちゃんは1人



で勝手に行動して姿を消します。

代表の中村は『警察に捜索願』という事も頭をよぎったそうです。窯元さんやその場にいた全員で必死に彼女を探しました。

私は彼女を探しながらものすごく不安な気持ちと、何でこんな問題行動ばかり起こすのだろうか？という怒りの気持ちが入り混り、複雑な心境だったことを覚えています。

帰宅予定時間をオーバーし薄暗くなってきた頃に、何事もなかったような表情で彼女は無事に戻ってきました。もちろんお説教をされたのですが、私はそれだけでは正直納得がいきませんでした。

この件だけでなく日常繰り返す問題行動に、私は非常にストレスを感じていたからです。

この大騒動の日はちょうど夕方からスタッフミーティングを予定していたので、私はその場でやりきれない思いを他のスタッフに吐き出しました。

後日代表の中村は、彼女のご祖父母にこれ以上問題行動を起こしたらフリースクールでは受け入れられないという事を伝えます。彼女自身の問題行動が受け入れられないというよりは、フリースクールの存続を脅かすような行動をされると、他の子どもたちを巻き込んでしまう恐れがあるとの判断からでした。

彼女にも同じように伝えたそうです。

その一件以来、彼女は結界を張ることも、突然いなくなるような問題行動も起こさなくなりました。「ここにいられなくなる」という気持ちが行動を抑制したのではないのでしょうか。

そして彼女にとっても、フリースクールという場所が大切な「居場所」になっていたのだらうとも思います。

音楽をきっかけに変わった関係

相変わらず天の邪鬼で小生意気なSちゃんでしたが、この頃ある「出会い」があります。

当時フリースクールはバンドブームで、ギターやベースを持ち込みそれぞれに好きな曲を練習したりしていました。特に子どもたちに人気だった

のが、シンガーソングライターのYUIでした。車での移動中も常にYUIの曲が流れ、私も口ずさめるほど覚えていました。

彼女もYUIに夢中になり、「ギター」と出会うことになります。家に合ったアコースティックギターを持ち込んで練習したり、家に帰っても相当練習していたようで、みるみるうちに上達していききました。

何よりも驚いたのが彼女は楽譜が読めないのにギターを弾いているという事！なんと耳から音を取って覚え演奏していたのです。これには本当に驚きました！！

自己流の練習を重ね技術を身につけモノにした彼女は本当にすごいと思いました。そう感じていたのは私だけではなく、他のスタッフも同じように感じていました。

そこで2008年に開催された「全国子ども交流合宿IN佐賀」の中で、音楽交流をやりようということになり、Sちゃんはそこで1人でギターを弾き歌いあげました。

その時の感動は今でも忘れていません。

長崎からご祖父母も駆けつけ、彼女の晴れ舞台を見守っておられました。

結界を張ったりして散々スタッフの手を焼かせていたSちゃんが、短期間でこんなに変わるなんて想像もしていませんでした。変わったというより、自分らしさを取り戻したという方が正しいのかもしれない。

家庭のことや友達のこと、色々な悩みを抱えながらもそれを誰かにうまく伝える事ができずに苦しみ、奇妙な行動を繰り返していた結果、家族内や学校でも浮いてしまい疎外感を感じていたのだらうと思います。

でもフリースクールに来て自分を受け入れ理解してもらえたことで、奇妙な行動を取る必要もなくなり、同時に周りの人達の事も少しずつ受け入れられるようになりました。

もし彼女がフリースクールと出会わず無理やり学校に行かされたり、不登校から引きこもりになってしまっていたら、この日の彼女の姿はなかったと思います。

その後、彼女は買ってもらったエレキギターを弾いたり、友達と楽しく過ごしながら、高校に進学するまでフリースクールに通いました。

高校進学は絶対にすると彼女の中で決めていたと言っていました。当時通っていた子どもたちもほとんどが高校へ進学していたので、その影響も受けていたのかもしれませんが。

彼女は県立の通信制高校を受験し合格します。これはSちゃんに限った事ではないのですが、新たな道を見つけ進んでいく子どもたちの成長は本当に嬉しいのですが、同じくらい寂しくもあります。

子どもたちもここを離れるときは不安があると思います。でもここは卒業してもいつでも戻って来られる『居場所』です。

今でも多くの卒業生が悩みの相談に来たり、凹んだ気分を紛らわしに来たり、時には嬉しい報告をしに来てくれたりもします。こうした安心感も子どもたちが巣立っていける支えになっているのだと日々感じています。

勉強の壁

そしてSちゃんも高校は必ず卒業する！と巣立っていったのですが、現実はその甘くはありませんでした。

まず彼女の前に立ち上がった壁は『レポート』でした。

通信制の高校なので、学校に行くのは週に1日。その代わりに課題として『レポート』を作成し期限までに提出しなくてはなりません。それも全教科です。

お祖母さんは彼女の為に家庭教師をつけたのですが、続かなかったそうです。

そこでお祖母さんは考えた末に、代表の中村に家庭教師をお願いしてきたのですが、彼は多忙で家庭教師に行く時間を確保できない為、私の元に話が回ってきたというわけです。

私自身も不登校経験者で高校を中退しています。勉強なんてほとんどしていない自分が、人に教えるなんて無理だろうと最初は迷いました。

ただSちゃんとはそれまで関わってきた経緯があり、彼女を応援したい、頑張って高校を卒業してほしいという思いも当然あったので、引き受けることにしました。

ところが訪問して彼女の態度に啞然とします。とにかく勉強する気がない……。

レポートの内容自体はそんなに難しいものではなく、教科書を見れば解答が見つかるように作成されているので、やろうと思えば1人でできない内容ではありません。でもやらない。

見かねたお祖父さんが鉛筆で解答を薄く書き、彼女がそのまま写せるようにしてあったり、解答が掲載されているページが回答欄に書いてあったり、とにかくそこまでお膳立てしてあるのにやらない状況で、時には行っても部屋から出てこないなんて日もありました。

それでも週に2回程度ですが、通い続けることで少しずつ勉強に取り組む時間が増えていきます。一緒にレポートを見て解答を教科書から「探す」



という感じで、勉強と言える程のことはしていないのですが、それでも進歩でした。

実は高校に入学した頃、学校に通えずに引きこもっていたSちゃん。

家庭内でもかなり荒れていたようで、お祖母さんにカレーを投げつけた話を聞いたこともありました。

高校では頑張るぞ！と張り切って入学したのに、また不登校になってしまったことで彼女自身が一番傷ついていたんだろうと思います。

そのやり場のない苛立ちが、ご祖父母に向かってしまったということも理解できます。

私はこのまま辞めるかもなあと思っていました。

でも彼女は高校だけはちゃんと卒業したいと強い意志を持っていました。もちろん彼女のご祖父母もそう望んでおられました。

それでも私は学校に行くことを促したことはありません。行く・行かないは彼女が決めることで、彼女が選択した事を応援するのが私の務めというスタンスです。ただレポートの作成と提出だけは先のことも考え徹底してやりました。

通信制でももちろんテストがあります。テストを受けないと単位に響き進級にも関わってきます。そのことは十分に彼女も理解していたので、もちろん受けに行きました。しかし行くまでにもかなりの葛藤があり、なんと自宅から学校までタクシーの送迎付き！そんな彼女を先生方は優しく受け入れ、テストを無事に受けることができました。

そうやって1つ1つ課題を乗り越え、学校に友達ができ、夏以降からは少しずつ自分のペースで通えるようになっていきました。

レポートは相変わらずなかなか一人では進められない状況でしたが、テスト前は日数を増やし「赤点取ったら跳び蹴りね」なんて会話もしながら、提出物は全て提出しテストも全て受け（赤点はありました）、無事に2年生に進級。その後も同じペースで訪問し、レポート作成をしたりご飯を食べながら世間話をしたりと、順調に進んでいました。

祖父の病気という転機

ところがまた彼女に試練が訪れます。

お祖父さんが癌を患い入院されることになったのです。

お祖父さんが入院されている間、お祖母さんは病院と自宅の往復で、Sちゃんは1人で過ごす時間が多くなり寂しかったらと思います。いつもは訪問すると必ず出迎えてくださるお祖母さんに会えず、私も寂しく感じていました。

それでもレポートは提出しなければならないし、学校もあります。

お祖父さんのサポートがない分これまで以上に勉強を頑張り、さらに家事も手伝いながらお祖父さんが元気になって帰ってくる日を、彼女は待っていました。でもお祖父さんが帰宅することは叶いませんでした。

Sちゃんが高校2年生の夏前だったと思います。お祖父さんが死去されました。

私はこの事を彼女からメールで伝えられました。

文面では気丈に振る舞っていましたが、これまで5年近く彼女に携わってきた中で、お祖父さんの存在が彼女にとってどれ程大きいものかということは推測できます。

元気になって帰ってくると信じて、勉強もお手伝いも頑張っていた姿を思い出すと、胸を締め付けられるような哀しさが私にも襲ってきました。

私は代表の中村と共にお通夜に参列したのですが、私自身もお祖父さんが亡くなられたことがとてもショックで、あまりその日のことを覚えていません。

覚えているのはSちゃんが「じいちゃんの最後の顔を見てあげてください」と言って来て、お棺に横たわるお祖父さんの顔を拝し涙が込み上げてきたこと。そしてSちゃんが私の腕の中で思い切り泣いたこと。一緒に泣いたこと。

辛い経験でしたが、彼女も私もお祖父さんの為にも頑張って高校卒業しようと、改めて共通の目標を持ち気持ちをひとつにすることができました。

その後は進路のことも積極的に考え、美容系の専門学校を探したり学校の先生に相談したりもし

ていました。残念なことに専門学校への進学は、家庭の事情で断念することになるのですが、彼女が自分としっかり向き合い、将来について考えたことは大きな成長でした。

私は彼女が学校を卒業するまで訪問を続けるつもりだったのですが、今度は私の母が癌を患い訪問を辞めることとなり、彼女への支援も終了となってしまいました。

訪問を辞めてからはSちゃんと特に連絡の取り合いは無く、高校を卒業した時に電話をもらい話したくらいです。

高校卒業後は居酒屋でバイトをしていたので何回か飲みには行きました。その時初めて彼女が働いている姿を目にしたのですが、もう感動を通り越していたと思います。

大変な時期を共に過ごしてきた分、成長した姿を見る時は本当に、本当に、幸せな気持ちでいっぱいになります。

この仕事の一番の醍醐味です！！

フリースクールで出会った 関係が続けながら

そして現在21歳になったSちゃんは、アパレル業界で頑張っているようです！

この執筆にあたり久しぶりに会って話をしてみました。

まずは私が訪問を辞めた後の事です。彼女は実家に戻りご両親と共に暮らし始め、自分で勉強をしていたそうです。登校日以外にも学校へ行き、分からないところを習い卒業まで至ったということでした。私は訪問を途中で辞めてしまった事を非常に申し訳なく思っていたのですが、逆に辞めたことが彼女の自立に繋がり、結果として良かったのだと思い、少し心が軽くなりました。

他にも今の職場はフリースクールで仲良くなったMちゃんが紹介してくれたという事や、やりたいことがたくさんあって寝てる時間が勿体無いなど他愛のない話ばかりでしたが、Sちゃんから充実した毎日を送っていることが伝わってきて、とても嬉しく思いました。



何より嬉しかったのは、フリースクールで出会った友達との関係がずっと続いていて、今でもよく遊んでいること。不登校してなかったら出会えなかった友達だから、不登校して良かった～と笑顔で語ってくれたことでした。

Sちゃんのように不登校になってもフリースクールで学校とは違う形の学びを経験したり、高校に進学したり、社会へ出て働いている子どもたちを私たちはたくさん見てきました。

子どもたちひとり一人の個性を尊重し、その子に合った学びの場を提供することで、子どもたちは自ら成長していきます。彼女もそのことを実感していて、おばあちゃんがフリースクールを見つけてくれたことを感謝しなきゃねと話せるまでに成長しました。

そんな彼女はもう結界を張ることはないんだなあと思うと、それはそれで淋しい気もしますが、今後も彼女の成長を見守り続けたいと思っています。

ヒューマン・ハーバー Human Harbor



【団体名】 フリースクール「ヒューマン・ハーバー」

【活動地域】 香川県高松市

【会員数】 10名

【スタッフ数】 常勤2名・ボランティアスタッフ7名

【活動理念】

子どもたちが生きていること全てが学びという理念に基づき、遊びの中から創造力・コミュニケーションスキルが養われ、豊かな成長ができると考えています。

多様な価値観を持ったメンバーが、お互いを尊重し、この居場所に関わる全ての人の自由を保障しています。

【活動内容】

ミーティング、音楽活動、農作業体験、スポーツ、人形劇団運営、講演会・パーティ・地域イベントに関する企画・運営、老人ホームや地域清掃等のボランティア活動、創作・表現活動、異年齢の子ども同士遊ぶ、学習タイム。



入会の際に気をつけている姿勢や工夫

入会の際の面談

入会を希望の際には、親御さんや祖父母の方から電話連絡を受けることが多いです。

その段階で、学校に行っていない子どもさんが一緒に来れない場合、保護者の方と面談をします。

お子さんの様子を聞いた後、保護者の方がフリースクール「ヒューマン・ハーバー」に何を求めているのかをお聞きし、ヒューマン・ハーバーの理念及び活動内容などをお伝えします。

この時点で理念を理解して頂けない場合は、何度も話し合いを重ねます。

最終的にお子さん同席の面談をします。親御さんがヒューマン・ハーバーへの入会を強く望まれても、お子さんがまだ外に出たくない状況の場合、無理に入会しても子どもの心の居場所ではなくなるので「子どもにとって一番安心できる場所が、今のところご家庭にあるようですから、もう少し、ゆっくり時間を掛けて子どもと関わってはいかがでしょうか」と説明し、一旦入会を保留にします。この場合でも数ヶ月後に子ども本人から連絡があるケースは多々あります。

そして再度入会面談をして、本人が入会を望んだ場合は、3～5日間自由に体験して貰います。

体験後、ヒューマン・ハーバー入会を子どもが希望した場合に限り、正式に入会手続きをします。

その際、必ず伝えるのは「学校のように毎日来なくていいし、いつ来ていつ帰っても自由だし、いつでもやめることが出来るから安心してね」と不安な子どもの気持ちに寄り添いスタートします。

入会直後の様子

ほとんどの子どもは学校の友人からのいじめや、時には先生から暴力をふるわれ、人に対する恐怖心を持っています。対人恐怖症や視線恐怖症傾向の強い子どもに対しても特別視することなく、どの子どもに対しても同じ態度で接するよう心がけます。ただし、スタッフ間のルールとして、なぜ

不登校になったのか？など、入会直後は今までの心の痛みには触れないようにしています。

過去を振り返っても辛さを思い出させるだけで、何の役にも立たないからです。私たちスタッフはゆっくりその子のペースに合わせて寄り添うだけの日々です。色々な事情があつて学校に行かない選択をした子どもたちの一部は、背景に家族の問題を抱えています。自分を最も愛してほしい親との愛情のかけ違いが、子どもの心の傷となっているケースも多いのですが、子ども自身、大好きな親について話したり、触れることも殆どありません。時間の経過とともにフリースクールが安心できる居場所になり、人間関係の再構築が出来た子どもは、自分がなぜ学校に行かなくなったのか、時には親との関係を冷静に分析し、ポツリポツリと話し始めることもあります。その際も目の前の子どものありのままを受け止め、信じ、寄り添っていけば、スタッフとの信頼関係も無理なく築けるようになると確認しています。

大人であるスタッフが、子どもたちに対して指示や支配をしないようスタッフ間で共有認識しています。指示や支配のない子どもたちとの関係は、子どもに伴走し、子どもの内なる学びの欲求に寄り添う大切な時期と考えています。入会時の子どもはエネルギー不足に陥り、何もする気が起きず、親にとって無気力状態に見えますが、十分にエネルギー補給ができれば、好奇心の塊である子どもたちは、さまざまなことにチャレンジします。大人が心配して何かをさせるより、自主的に動けるようになった子どもは、大人の想像をはるかに超え奇跡と思えるほどの計画を立てたり、実行していきます。スタッフはその時期が来るまで、子どもを信じてゆっくり待っています。

やりたいことがあるけどやれない、何をやらいいかわからない子どもたちもいますが、活動の要となっているミーティングで、そのような問題は徐々に解消していきます。

人と話すことが苦手、自分の意見が言えない子どもたちは、最初ミーティングに戸惑い、スタッ

フと目を合わさないように時間を過ごします。これは自分を守る一種の防衛本能だと思いますので、スタッフから意見を求めることはありません。黙っていてもいいし、横になっていてもいいのですが、決められたミーティングの日に参加せず何かが決まったら、その意見を尊重することはルールとして子どもたちが決めています。しかし、決まったことに対して不服があったり、なにか不都合が生じた場合は、次のミーティングで反対意見や自分の思いを伝えることにしています。ミーティングを通して、子どももスタッフも同じ1票の権利を持って居場所を運営することが、民主的なフリースクールのあり方だと思います。

他にもフリースクールでは、子ども、スタッフ、親御さん、外部からの支援者など関わる全ての人の自由を保障することを大切にしています。

最初は話さない、目も合わさない子どもたちがミーティングを積み重ねることで、自分の意見が

尊重され、自己実現できる喜びを体験できれば、控えめに手を挙げて発言し始めます。

そして話す事の喜び、尊重される安心感が、自信を取り戻す大切なチャンスとなっていきます。

子ども同士の関わりは、時間を掛けることによって、少しずつですが良い関係が作られます。

親子関係の問題に関しては、極力親御さん（ご両親が揃っていれば父親と母親）と子ども同席で話す機会を作ります。子どもは親に対して萎縮していることが多いので、本人（子ども）の許可をとった上で、子どもの本音を代弁したり、現実に即した方法で問題解決に向けて、スタッフとしてできる範囲のサポートを心がけてきました。

以上、フリースクール「ヒューマン・ハーバー」が入会・入会後に子どもたちとどのように関わるかの概要を書きましたが、本題である「ヒューマン・ハーバーに所属し、既に卒業したメンバーのヒストリー」に焦点を当てて書いていきます。

「なんでもちゃんとしなさい」と言われてきた F君の例

F君は1985年生まれで、現在は結婚し、一児のパパとなっています。

入会前からバスケットクラブの立ち上げまで

母親から再三電話があり、一度見学に行きたいとの連絡でした。しかし、本人が部屋を出たがらず連れて行くは難しいとのことだったので、本人が興味を示したり、動き始めるまでは無理をしないよう伝えましたが、しばらくして、母親とF君と一緒に見学に来ました。

人見知りが激しそうな中一の少年で、3日間の体験中はスタッフの隣で黙って座っていることが多かったのですが、体験終了後にF君同席の上、丁寧に入会面談をしました。スタッフが尋ねるより早くF君から「続けて通いたい」とはっきりした意思表示があり、正式に入会手続きを行いました。

その日から卒業まで、自宅から自転車で最寄り駅まで行き、ヒューマン・ハーバーがある三条駅まで電車に乗り、毎日片道1時間近くかけて通う

毎日でした。内気な少年は「水を得た魚」のように生き生きとして、自由に振る舞う事ができる居場所があって、ホッとしたりと言っていました。

この時期にスタッフがF君には、「週一回ミーティングがあるから、みんなで何かしたいときは、ミーティングで提案し、お互いの意見を尊重しながら決めるルールがある」ことも含めて、フリースクールでの基本的な考え方や、「特に何かをしなくてもいいし、いつ来て、いつ帰っても自由だから、『～しなければならない』という気持ちを持たないでね」と話しました。

家庭では勉強でもスポーツでも「きちんとちゃんとしなさい」と言われてきたらしく、最初は何かしらいいことに戸惑った様子でしたが、周りのみんなが自由に好きなことをしているのを見て、スタッフが言っているのは本当のことだと安心できたそうです。

少しずつ他のメンバーとの信頼関係ができ、ミーティングで「大好きなスポーツをみんなとしたい」

と意見を出しましたが、ゲーム好きな子が多く、スポーツには関心を示しませんでした。

そんな時には、ミーティングでF君に「どんなスポーツをどのようにしたいの?」と、少し具体的なイメージができるようにスタッフから質問をしました。

「バスケットクラブを作って、大学生と試合ができるまで上達したい!」と具体的な意見が出たときは、みんな唖然とした表情でした。出来るかできないか分からないけど、面白そうという気持ちが湧き出て、それからは部活と称してチームメンバーが一丸となり、練習に明け暮れる日々を送り、F君はバスケ部部長として初めてボールに触る子たちにも丁寧に教える立場となりました。

学校と違い、フリースクールではお互いが先生や生徒の立場となり、年齢にも関係なく教える人であったり、習う人であったりという関係が出来上がっていきました。試合相手の大学生もF君が探してきて、月一度の練習試合をしましたが、バスケットのルールも知らない素人と、バスケ部に所属する大学生とでは、子どもと大人が試合しているような状況で惨敗続きでした。

しかし、試合が終わってから試合に出たメンバーと出れなかったメンバーが一緒になって、「何故負けたのか?」「どうすれば次回はもっとまじな試合運びができるのか?」など、真剣なミーティングをしました。

この振返りのミーティングこそ、フリースクール「ヒューマン・ハーバー」が実践している子どもが主体となる学びです。話すことが苦手だった子、スポーツが嫌いだった子が、F君の情熱に引込まれるように、練習を重ね、振返りミーティングでは真剣に意見を戦わせ、先月より少しだけでもいいから成長したいという思いを共有する、大切な体験となりました。

大学生も卒業したりして、メンバーが変わりましたが、初めて練習試合をしてから3年後に奇跡が起きました。強敵である大学生相手に試合に勝ったのです。

当時、F君の中学校校長や担任の先生がバスケの練習をしている体育館に様子を見に来ていましたが、「学校で先生が決めたカリキュラムで、こんなに長時間集中して練習させると生徒たちから苦

情が出るので、不可能です。自分たちで練習内容や時間を決めて、全てのことを主体的に行動できるフリースクールだから子どもたちが生き生きとしているのじゃないかな」とおっしゃっていました。

ヒューマン・ハーバーは子どもたちの承認が取れば、いつも外部に対しオープンな場所として、学校の先生たちにも子どもの様子を見ていただき、意見交換をしてきました。

いかなる場合も、子どもにとって不利益にならないよう配慮することは重要だと考えています。

親の会

F君にとって大きな問題になっていたのは、家族関係でした。

祖母(父方)と両親、兄の5人家族でしたが、父親が企業戦士と言われる世代のサラリーマンで家庭のことは母親任せでした。学校に行かないF君のことで、いつも祖母から「嫁が悪いから孫が学校に行かなくなった。普通の育て方ができない」と言われ続け、精神的に参っていました。

親の会で同じような経験を持つお母さんたちとおしゃべりする時間が唯一の休息と言っていましたが、家に帰ると針の筵むしろのような生活が待っていて辛いことを訴え続けました。これは不登校をしているF君だけの問題ではなく、家族を一つのフレームとしてとらえた方がいいと考え、帰宅の遅いお父さんが帰る夜中に家庭訪問をしたことがあります。F君も母親の辛さが自分の辛さになっているので、助けてほしいと希望したので、父親と会う事にしました。お母さんが抱える問題は一人では解決できないほど大きいので、大きすぎる荷物を一緒に背負ってあげて欲しいことや、具体的に家族としてどのように再構築していけばいいかを話し合いました。父親は仕事が忙しく、しっか



りしている母親に任せておけば大丈夫という気持ちを持っていたようですが、事態の深刻さに気が付き、母親にしっかり寄り添うようになってから、母親も本来の元気を取り戻しました。

子どもに視点を当てるだけでは解決できない点については、家族の問題として一緒に話し合う状況設定など、側面の支援も大切にしてきました。

学校との関わりは問題なく、担任の先生がフリースクールで活動中のF君の様子を見に来ることは、親御さんとF君の理解が取れていましたし、ヒューマン・ハーバーへの出席日数や様子を知りたいと学校側から要望があれば、提出したこともありました。

しかし、在籍校の校長先生とも話し合い、出席日数の提出などに意味がないことを理解してもらってから、そのような煩雑な事務作業をスタッフが担う事がなくなりました。

毎日欠かさずヒューマン・ハーバーの活動に参加していたF君にとって、学校への出席日数提出は、どちらでもいいこととっていました。今は亡き渡辺位先生が講演会でおっしゃった「出席日数や卒業証書は買い物後に貰うレシートのようなもの」とのお言葉は、不登校をだめなことと考える親御さんにとって、「目から鱗が落ちる」ごとく衝撃的な表現で、救われた親御さんが多かったと記憶しています。F君の母親も渡辺位先生の講演会で救われたお一人です。

自転車旅行をきっかけに

ヒューマン・ハーバーでは、2000年に42日間掛けて高松～沖縄へ自転車旅行に行きました。

自転車旅行の数年前から所属するメンバーが計画を立て、自転車の乗り方、日々のテントの張り方、飯盒炊爨の方法など、地域の色々な方に教えて頂



き16名が3チームに分かれて出発したのですが、F君は先頭チームのリーダーでした。沖縄に着くまでにも怪我をして救急車を呼ぶ事態が3回ありましたが、臨機応変に子どもたちに対応し、無事に沖縄に到着しました。

自転車旅行そのものが総合学習であり、フリースクールで子どもが主体となって学ぶ貴重な体験となりました。自転車と車(1台)に分かれて子どもたちに伴走するスタッフ(大人)は、自発的に行動する子どもたちの安全を見守る役割だけで、全てを信じ任せていました。ヒューマン・ハーバーの今までの活動で、自分で考え行動する力や、自分の言葉で話す力を養ってきましたので、突発的な事態が起きても最優先にすることを瞬時に判断し、行動に移すことができていました。特にF君は仲間からの信頼も厚く、最後までリーダー的な役割を果たせていたと思います。

この体験旅行で沖縄滞在中にスキューバダイビング初級の資格を取った事がF君の人生を決める第一歩となり、その後もヒューマン・ハーバーに通いながら、将来を具体的に考え始めました。

ヒューマン・ハーバーでは卒業時期を自分で申告するルールがあり、卒業式では将来の展望を30分ほどメンバーに向けてスピーチすることになっています。卒業式当日は、在籍校の校長先生、親御さん、卒業生、所属する子どもたちの前で、将来の仕事への夢や展望を30分以上スピーチし、全員一致でF君の卒業をお祝いしました。

ダイバーになる夢に向け就職先へ自分で連絡し、一人で沖縄まで面談を受けに行き、無事採用されました。将来の夢に向かって自分を信じ行動する力は、フリースクールで様々な体験をし、多くの人と出会い、その中から色々なことを学んだF君の大切な宝物です。

現在はダイバーショップナンバー2(ナンバー1はオーナー)の立場で、面白いアイデアを出したり、関東圏からお客様を呼ぶ説明会を東京で開催したり、ヒューマン・ハーバーで培った企画力と行動力を活かして、楽しく今の仕事に取り組んでいるようです。ヒューマン・ハーバーのメンバーとしては、レジェンドの領域ですが、F君の豪快な生き方は今でも語り継がれています。

ふおーらいふ For Life



- 【団体名】 特定非営利活動法人ふおーらいふ（フリースクール ForLife）
- 【活動地域】 兵庫県内、神戸市内
- 【会員数】 19人
- 【スタッフ数】 14人（常勤2、非常勤4、ボランティア8）
- 【活動理念】 学校外で学び育つ子どもが主体的に創造する居場所の提供
生活者であることを大切に、「子どもがつくる・子どもとつくる」
活動を通し、自己肯定感やコミュニケーションを高める



【主な活動内容（フリースクール）】

- 自然体験（キャンプ、里山遊び、農業体験）
- 地域交流（区民スポーツの日、西水環境フェア、ボランティアまつり、地域文化祭、商店街歳末フェア、フリーマーケットなど）
- 学 習（個別学習、実験、総合学習）
- その他（木工、アート、料理、スポーツ、音楽、仕事体験など）



入会の際に気をつけている姿勢や工夫

入会前、入会時の様子について

ふぉーらいふでは、入会前に相談に来られた折に「相談カード」^⑧に記入していただいています。

そこで不登校になった経緯、現在の状態、保護者の子どもへの希望などを書いていただいた上でそれに基づいて相談に応じ、それによって保護者の考えや子どもの現況をある程度把握します。

一方子どもの訪問カードには、名前・住所などのほか趣味やフリースクールへの質問などの欄があり、子ども自身が書きたいと思うところだけ記入してもらいます。それによって筆圧や字の大きさなどで、子どもの様子を受け止めています。子ども本人の希望があれば体験をしていただき、2週間の体験後、三者で面談をして本人の意思を確認したうえで、入会を決めます。

山本さんと木村さんの事例から

山本みどりさん（仮名）の例

入会当時小学6年生で父親と面談に訪れました。不登校の理由は色々な状況下での不安（社会不安）を抱えていたためということでした。当時FLには小学生はおらず、しかも男の子が多い中でしたが、ゲームやアニメの話で中学生とも共通の話題があり、少しずつ場に馴染み入会を決めました。

彼女は、言葉数が多い方ではなかったけれど、その表現の一つに絵の世界がありました。折に触れ彼女の描いた絵を皆で見せてもらいながら、彼女の絵の世界（ストーリー）を皆が楽しみ、彼女が活動に参加しやすい環境を整えていきました。描かれる絵に明るさや希望が見えて来た時、初めての「卒業パーティー」に彼女が作ったストーリーを劇にしたいと本人からの申し出があり、年上の子どもたちは快く役を引き受け、みんなで協力して楽しい劇を創りました。そのような機会を得て、彼女は次第にフリースクールの来る頻度も多くなりました。

しかし、父親が単身赴任になった頃、彼女は再びフリースクールに顔を見せなくなりました。母親は仕事、姉は学校と一人での留守居の中、カーテンを全部締め切って部屋の中で何もしないで過ごしていたようです。ある時電話がつながり、とりとめのない話やその日の出来事、趣味の話、な

ど普段のおしゃべりができたのをきっかけに、彼女の方から電話がかかってくるようになりました。私は親から嫌われているのではないかと、なんでもできる姉が優先されているのではないかと、などの悩みを打ち明けようになりました。

本当はフリースクールに通いたいけど「一人では行けない。マンションは一人で出れる。目印のところまでは行ける。」と言うので、親御さんにもそのことを連絡して、気持ちの負担にならないように「近くに用事があるからついでに行くね」と伝え、何回かの送迎が始まりました。

中学3年になると、同年齢の子どもとの関わりの中で、絵に興味のある仲間とのつながりができました。市のデザイン公募を紹介すると、それに応募するなど積極的になっていきました。その時期フリースクールでも美術の専門家を招いてのデッサンや絵画を楽しむ講座も作り、彼女の精神的な後押しをしました。その先生の個展と一緒に観に行ったり、美術展なども彼女が行きたいものをプログラムに組み込み、絵に関心のある子どもへのアプローチも同時に行いました。

また、表現の一つとして「音楽」が主流でもあった当時のフリースクールの活動に、女子バンドが結成されました。彼女はベースを担当し、メンバーと練習を重ねました。ある日、近くの教会で演奏

会の機会をいただき、彼女たちは、協調性や達成感を実感し、自信にもつなげました。

保護者への支援（相談）は、基本的に毎月の親の会と個別に電話や面談にて行いました。特に父親の単身赴任は、仕事を持つ母親への大きな負担であったようなので、折に触れにふれ連絡を取り合っていたように思います。

さて、進路については県立の通信高校を選択し「今まで十分休んだから」と目を見張る頑張りを見せました。フリースクールの活動や勉強、部活そしてアルバイトにも前向きでした。FLには「学習スタッフ」の仕組みが設立以来あり、個々の子どもニーズに応じて向き合っています。子どもから信頼される関係で、彼女も積極的に自学自習に取り組みました。高校入学後に彼女が選んだクラブは「創作部」。その夏、漫画甲子園に出場するチームに加えられ、先輩方と会場の四国まで出かけました。その後張り紙を見て飛び込んだアルバイト先は、数々ありましたが、転職の度に私たちは彼女の愚痴や不安をただ聞いて受け止め、社会の規範や見方を伝えました。

いよいよ高校卒業が見えてきた時点で次の進路（専門学校）を考えます。早くから自分の好きなこと（絵）に絞って考えていたので、いくつかの専門学校を見て回り最終的に相談に来ました。就職を視野に入れた時に「漫画」なのか？「デザイン」なのか？で迷っていました。どちらも好きならば、仕事としてやっていく場合に自分にとってどちらが現実的かを考えてみたら？とアドバイスをしました。デザイン学科を専攻した彼女は、ここでもまた悩み、不安を抱き相談に来ました。自分の力や人間関係に不安を案じていたようです。

「少しずつ」と急がないことが大切と話し、安心したように帰っていきました。その後は、友人もでき制作も順調で、卒業後はデザイン会社に就職し、現在8年目になります。

木村省吾さん（仮名）例

入会時中学1年の木村さんは、兄の不登校で、家中が混乱し悩み苦しむ中で振り回され、自身もしんどくなり、友達関係もうまく取れなくなり、やがていじめの対象になったと言います。進学した中学はいじめのひどい学校のため、いじめを見ているのも怖く不登校に。神経科にも、親御さんが疲れ果てていらしたのが印象的でした。入会当初から人の輪の中に居れて、皆の笑いの中心になるようなタイプでしたが、気を使いすぎて時折ふと自分の世界に入っているような様子も見受けられました。

次第にフリースクールでの活動も積極的になり、何事も一生懸命でした。彼がフリースクールで初めて手にした「ギター」と「沖縄自転車旅行」がその後の彼を支えたように思います。もともと「表現する」ことを彼は好み、フリースクールの紹介かれビデオやバンド活動を通じて周囲を明るく楽しませてくれるエンターテインメント性を発揮していました。彼の提案などに皆が共感できるような環境もあったようです。仲間とデュオを組んで中学生ながらストリートを展開。オリジナルの楽曲も作り披露するなど私たちに感動を与えてくれました。

沖縄の自転車旅行も中心的に動き、事前の準備から終了までを常にモチベーションを維持し仲間を引っ張っていました。平和学習・自転車修理と整備・旅行計画など綿密な準備をスタッフと共に



行い、最終的にビデオ編集をし、記録ビデオを制作しました。また、彼の興味関心を広げる形で施行したものに、大豆を育てながら様々な体験をする通年プログラム（食生活に関心を持ち、普段の食生活を主体的に選択していけるようになるプログラム）があります。大豆を育て豆腐作りも体験し、総合学習的な学びを行った後、最終的に木村さんは早朝から豆腐工場での実習に挑戦。ここで留学生と共に研修を積みました。そして、このプログラムで学んだことを文化祭にてポスター発表をしました。

日常のミーティングでは新聞の切り抜きを持ってきて、これなら自分たちにもできる社会貢献！と提案し、プルタブを集めて車椅子を贈るふぉーらいふの「車椅子寄贈プロジェクト」のきっかけをつくったのです。

さて、沖縄旅行を終えると木村さんは進路の問題で悩み、しばらくフリースクールを休むと宣言し、自分でゆっくり静かに将来を考えていました。高校は私立普通高校の調理コース。彼は自分で目標を決めると、それに向かって塾に通い、そのための勉強をフリースクールでしました。自学自習を旨とし、わからないところだけを聴く形で、スタッフも根気よく寄り添いました。そんな彼は担任の先生とのつながりはあり、ラーメン屋でラーメンをすすりながら進路の相談などをしていたようです。しかし、学校の出席認定は希望しなかったため、彼の学校とフリースクールの関係はほとんどなかった。

彼にギターを教えていたスタッフによると、最初にコードを教えた次には全てのコードをマスターしたりして、どんどん自分で身に付けていく努力をしていたと話します。

仲間とデュオを結成し「ゆず」の歌を中心に路上ライブをしたり、その後仲間とロックバンドを結成し、文化祭では大きな舞台も踏みました。卒業後は、地域のグループとも交流をしながらライブハウスにも出演。新たな音楽の境地を広げていきました。

両親は親の会へ毎月参加され、親が子どもにとつ

てどうしてやるのが良かったのか？と振り返りつつ、もっと「不登校」について学ばねばならないとの姿勢がありました。フリースクールの行事にも車出しをしてくださるなど、非常に協力的であり、そのことを通して、課題を解決されようとしておられました。

中学卒業と同時にフリースクールも卒業し、高校は調理コースを選びました。フリースクールでよく料理の試作や奇想天外なお菓子作りなどをしていたので、将来はその道かと周囲は思っていたところ、何か実習的なものやスキルを身に付けられるものでないと、普通コースでは続かないかも……と思ったようです。

当然アルバイトは調理補助などに限り、学業にも専念していました。

高校入学後は、学業というより学校の雰囲気や人間関係に悩み、中学時代の同窓からは「不登校」だったことを言いふらされたりして辛い日々もありました。真面目な彼はいつもどこかに力が入り常に「ON」の状態に見えたため、学校にすべてをかけるとしんどいし、たまには川べりでギターなど弾いてゆっくりしてもいいのでは？ ここでも私は「無理しないで」と頑張りすぎるタイプの彼に声をかけました。

また、理不尽な言葉を浴びせられた時は「お前から自転車で沖縄まで行ったことあるんか！」と心の中で叫んでいたと聞きました。

3年後、木村さんは芸大の演劇学科に合格したと報告に来てくれました。進路は私たちの予想とは全く異なるもの。既に高校時代から路上パフォーマンスをしている話には驚かされました。

彼が阪神大震災 20 年のメモリアルウオークに参加した時に、「なぜその道を選んだか？」を聞くと、「自分がフリースクールに行って、スタッフさん始めみんなが僕を笑顔にしてくれた。今度は僕が皆を笑顔にしたいから」と答えてくれました。役者を目指して大学在学中から劇団に所属していましたが、現在は東京に居を移し、演劇にお笑いに大忙しの「木村さん」です。

三重シュール Mie Shure



【団体名】 特定非営利活動法人フリースクール三重シュール

【活動地域】 三重県

【会員数】 16～24人

【スタッフ】 常勤2人（中・高教員免許）、非常勤2人、講師5人（高校教員免許）、ボランティアスタッフ6人（講座講師2人含む）

【活動理念】 「いっしょに生きる・『個』で育つ」

- ①ありのままを認め合う居場所でいっしょに生きる
- ②個を尊重した多様な育ち（学び方）・自己決定を大切にする
- ③お互いの権利を尊重し、活動は民主的に決定する



【活動内容（フリースクール）】

安心できる居場所で仲間と一緒に過ごす、ミーティング、個別学習、連携している通信制高校の学習、イベントなど子ども主体の活動

入会の際に気をつけている姿勢や工夫

入会前、入会時

三重シューレでは、親の願望によってフリースクールに入会させたいケースも多いので、本人の意思で入会を決められるように慎重に対応しています。そのため、初めに保護者の入会相談（三重シューレの理念も伝える）を2時間行い、その後本人に紹介していただき、本人が望んだ時に2回の見学を行っています。

入会相談を経て子どもの見学はない場合もありますが、これは子どもの気持ちを尊重した結果でもあり、もし、入会相談後に全ての子どもが見学に来た場合は、間違った入会相談をしたことになると考えています。

通信制高校との連携と自己決定を応援する場

三重シューレは、私立の通信制高校と連携しており、教員免許をもったスタッフが7人います。この7人は連携している通信制高校に講師登録をしています。

曜日毎に設定している各教科の学習を受けることができますが、講師から「出席しなさい」「レポートを出しなさい」と言うことは一切ありません。子どもが決めた授業への参加、レポート学習をスタッフが応援します。レポートやテストなどでスタッフが子どもを追いかけたことはありませんが、リタイアありません。

そもそも三重シューレには「～しなさい」「～しなければならない」という言葉は存在しません。私たちの理念と矛盾しない「自己決定」を応援する活動の一つになっています。

この通信制高校の学習は、中学から三重シューレに在籍している子どもの全員が中学卒業時点で始めている訳ではありません。三重シューレは「いっしょに生きる」居場所ですが、「個で育つ」成長の場であり、学ぶタイミングは様々です。

そのため、高校の学習のスタートも自分で決めることを提案しています。一年後に始める子どももいますし、高校を中退してきた子どもも三重

シューレで慣れてから数年後に学習を始めるケースも多いです。

「居場所」や「仲間」を求めている子どもが「いっしょに生きる」場に慣れて、その後必要であれば通信制高校の学習を選択するという具合です。

ちなみに、中学3年生などを対象とした「入会（入学）説明会」は行っていません。

よくある問合せの例としては、三重シューレで通信制高校の学習をすることをあらかじめ決めてから入会を希望するケースはお断りしています。

出席扱い

三重シューレでは、今まで入会した小中学校の子ども全員が学校の出席扱いになり、通学定期券が発行されています。三重県は南北に長く、津市はその中心に位置します。遠方から通ってくる子どもも多いため、通学定期券はなくてはならないものです。

小・中学校には定期的な学期末の報告（本人の様子を簡単に書きとめたもの、フリースクールへの参加状況など）を行います。

三重シューレでは在籍している学校の先生や校長先生が見学を希望される場合は、子どもがいない時間や休みの期間に来ていただいています。

人間関係

三重シューレのスタッフは対等な人間関係を築くことを大切に、信頼関係はその延長にあると考えています。対等な人間関係を築くために、スタッフは「子どもを評価しない」ということを徹底しています。評価には「叱る」「褒める」も当てはまります。「叱る」「褒める」の評価をした場合、評価される人と縦の関係が出来てしまいます。

しかも、他者からの「評価」を前提に本当に「自己決定」ができるのでしょうか？他者からの評価は「他者からの期待・願望」にもつながります。

不登校に関係なく今の日本の子どもたちは他者の評価をととても気にしています。

いじめられ経験を持つユキさんの例

入会前、入会時の様子

小学校6年生のクラスは生徒たちの先生に対する反発から学級崩壊状態。ユキさんのいたグループでは「はぶり」（仲間はずれ）が順番に回ってくることもあり、グループを抜け出そうとしたが、ひどいいじめを受けることになったとのこと。

頑張ろうという気持ちで学校に通うも、だんだん体がいうことをきかなくなり、時々倒れることもあり。その変化に気づいた母親が「無理して行かなくてもいい」と受け入れて、6年生の一学期から自宅でご過ごすようになりました。

初めてユキさんが見学に来た時は小学校6年生。見学当日は入り口で他の子どもたちに背を向けたまま過ごしていました。

ところが後日談では「とても自分に合っていて、行きたいと思った」が、「お金がかかることが気になり、行きたいことを親に言えなかった」とのことでした。

そこで、フリースクールに入会することをあらかじめ、中学の三年間は「座っていれば卒業できると考えて中学に通うことにした」とのことです。

しかし、小学校時代にいじめていた子とクラスや部活が重って「辛く」なり、夏休みに入る前に親に「三重シュレ」に行きたいと話し、自分から三重シュレへ電話をして入会の意思を伝えてくることになりました。

入会後のユキさん

無理をせずに自分のペースで少しずつ慣れていったようで、スタッフはユキさんの読書や手芸などをする日々の姿を楽しく見守っていました。スタッフがユキさんに対する特別な眼差しを持つことや、仲間との関係を作ることを意図的に働きかけたことはありません。

「自分一人の時間」と「仲間との時間」をそれぞれに楽しんでいたように見えました。

こうしてゆったりとした時間と日々の活動の中

で、自然に仲間の輪が広がっていきました。

本人は当時を「三重シュレに来た時は、しゃべったりとかみんなで遊んだりとかしなくて、ひとりで本を読んだりしていて・・・通っているうちにみんなのことを見ていたり話したりするようになって、だんだん元気になっていった感じ」と話しています。

「三重シュレに入ろうと思った決め手がシュレにいる人の人柄です。シュレのスタッフやボランティアさんは対等に接してくれるから嬉しいです」とは本人の言葉です。

自分の時間と仲間との活動

ユキさんは、一つのことを貫くというよりも、興味を持ったことに次々と取り組んでいきました。一つのことだけでなく、その時々興味に応じて、読書、雑貨・手芸制作、写真、機織り、料理など、自分が納得できるように時間を使えるフリースクールの中で、じっくりマイペースに活動していました。自己決定を尊重する三重シュレは「子どもの試行錯誤（いろいろな活動）を応援」したいと考えています。

また、ユキさんは「自分の時間・活動」に加えて、三重シュレで子どもたちが企画するイベント（キャンプ、地域のお祭りへのカフェ出店、アートショー、日帰り写真撮影、フォーラムなど）に



もほとんど参加していました。

さらに、自分から企画を提案することが多くあり、スタッフや他の子どもたちと相談しながら提案したことを実現していきました。

通信制高校の学習

ユキさんは、中学卒業の直前まで、中卒で仕事をすることを考えていました。

ところが、自分でハローワークに通ってみて、中卒では自分が希望する仕事に就けないことを知ることになりました。そこで、三重シューレで通信制高校の学習を始めることを決めます。中学の三年間は取り立てて教科学習はしていないように見えてましたが、好きだった読書によって養われた読解力によって高校の教科書の理解に大きな困難はなかったように思われます。

三重シューレで高校の学習を始めて以降は、通信制高校の学費は親が払い、三重シューレの月会費の4万円は本人がアルバイトをして納めました。三重シューレの始まる前の早朝や終わった後の夜にアルバイトをする忙しい日々の中でも、三重シューレで過ごすことや活動を楽しんでいるように見えました。そのユキさんが三重シューレで楽しく過ごす時間を共有できることはスタッフにとっても心からの喜びでした。

気持ちの整理

滅多にないことでしたが、本人から声をかけてきて、家族の事での悩みを聞いたことがあります。三重シューレには二つの部屋しかありませんが、学習などをする小さい方の部屋で聞かせていただ



きました。

話の最後にスタッフが応援できること（家族への働きかけなど）を確認すると、「話を聞いてもらったのでいいです」ということで、その後は自分で気持ちを整理して解決していました。

保護者会と保護者懇談

保護者主催の保護者会が年に2～3回あり、保護者の不安や経験を共感し合う場になっています。ユキさんの母親は入会当初は何回か出席されていました。

また、希望者に対しては学期ごとに保護者懇談を行っています。母親は数回、保護者懇談を申し込まれましたが、緊急の課題や大きな不安からくるお話はありませんでした。

出席扱いと通学定期

担任の先生が毎日家庭訪問をされていたことは、随分時間が経ってユキさんの口から知ることになります。先生の家庭訪問は、突然であり食事の時間にも来られたとのことでした。

ユキさんは「私の担任の先生は、私が三重シューレで楽しく生活していることを知っていても、学校に戻そうとしていました。人によっては嫌いな子もいると思うんですけど・・・私が楽しくやっているのに連れ戻そうとする先生に、一度、三重シューレを見てほしいと思います」と語っています。

巣立った後……

ユキさんが三重シューレで高校卒業資格を取得して巣立って5年になります。卒業後に就職した和菓子屋さんで今も働いています。

当時、高校の新卒の求人には、希望するお菓子屋さんが無かったため、自分でハローワークに行つて「中途採用」で募集している和菓子屋さんを見つけました。自分から高校の新卒で受験することを交渉して、試験を受けて就職したお店です。

初めはベテランの「お局様」がいて、とても苦労していたようです。時々、三重シューレに遊びに来て話を聞いたことがあります。

先日、OGの3人で三重シュールに遊びに来た時に聞いた話では、今では周囲の人間関係も変化し、落ち着いて和菓子屋さんの仕事を続けているとのことでした。また、好きで作り続けてきた雑貨・作品を大好きな美容室に置いてもらい販売もしています。

「自分で働いて、好きなことをやる」……三重シュールにいた時と一緒のようです。

フリースクールで何を学び、 何が子どもを成長させたのか

何を学んだのかは本人でなければわかりませんが……。

いじめの被害、学級崩壊からの不登校、時折倒れることがあるほどに身体的にもしんどい状態……そして今では厳しい職場の中で働き、好きなことを続けながら生きている姿。

きっと相当にタフな根っことしての自己肯定感が育っているのではないのでしょうか。

それは、前半で書いた「シュールのスタッフやボランティアさんは対等に接してくれるから嬉しいです」というように、三重シュールの人間関係、子どもとスタッフとの関係が本人が成長する環境に合っていたのかも知れません。

ユキさんは「三重シュールではキャラを作らなくていい」と言っていました。

大人からは「いい子」を求められ、友だちから期待される「キャラ」を演じることに疲れ果てている子どもは多いのではないのでしょうか？ その

ような社会を大人が作ってきました。

やっと見つけたフリースクールにも評価があったらどうなるのでしょうか？

一瞬は嬉しくても、ここでも「褒められる自分」「期待されるキャラ」でいることが必要になるのではないのでしょうか？

以前、ユキさんに「三重シュールでは評価されることはないけど、仕事では評価されるけど大丈夫？」と聞いたことがあります。

ユキさんは「仕事だから当たり前」とあっさり答えていました。

今の時代は、会社の仕事やアルバイトでは厳しく評価されます。子ども・若者は、人手が不足していた高度経済成長時代とは異なった厳しい評価社会に巣立つことになります。

もし、無条件で自分の存在がありのままに認められた実感がないままに、その厳しい社会で評価に晒されたら……それは自分の存在や人格が否定されたような実感を抱いてしまうのではないのでしょうか。

その社会が厳しければ厳しいほど、ありのままの自分の存在が肯定されてきたという実感が必要になると三重シュールでは考えています。

「他者の評価」に縛られず、「キャラ」も作らず、ありのままの自分が認められてきたという実感（自己肯定感）を育める時間と空間……ユキさんにとって三重シュールがそのような場所であったのなら、スタッフにとってこれ程嬉しいことはありません。



文化学習協同 ネットワーク

Bunka Gakushu
Kyodo Network



【団体名】 特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク

フリースペース・コスモ

【活動地域】 東京都三鷹市

【会員数】 21名

【スタッフ数】 4名、ボランティア6名

【活動理念】

安心安全の居場所をベースにして、さまざまな人やモノと出会い、自分や社会に対する否定的なイメージを肯定的なものへと組み替えていく。それによって、社会で安心して生きる自分を取り戻していく。自分で考えて自分達でやってみる力を回復するための、体験学習、グループ学習、表現学習が活動の柱である。

【活動内容】

コスモのプログラムはどれもメンバーたちの「何かしたい」という思いから生まれたものばかり。「メンバーたちのペースでメンバーたちのしたいことを」それがコスモの学びの基本だ。頻繁に行われるミーティングもメンバーたちの主体性を育てる大切な学びで、何事も誰かが一方的に決めるのではなく、共に考え、最終的には自分自身で決めることを大切にしている。そして、仲間と一緒に自分の手足を動かし、自分の五感を使って課題を乗り越える体験に基づいた学びが中心である。そうした体験を言葉にして発表する機会を設け、達成感や自信の回復を図っている。また、「親の会」には保護者たちが主催する月1回の会合があり、不登校ならではの悩みを相談し共感し合っている。時には不登校の親歴十何年という大先輩からのアドバイスが聞ける貴重な場にもなっている。

下を向いて話ができなかった梅子さんの例

入会前・入会時の様子

インテークを担当したスタッフは、相談に訪れた梅子（当時 11 歳・仮名）のお母さんとお話する中でとてもゆったりした雰囲気の方だと思ったという。前の小学校でひどいいじめにあったので以前のような元気を取りもどして友だちと関わって欲しいということだった。梅子の好きなことを聞いて次に本人が来るときの迎え方を相談した。本人はもちろん、コスモに既に通ってきているメンバーにとっても、新しいメンバーの見学や体験は大きな刺激である。緊張して来るだろうから、建物を見るだけでも良いし、ちらっとメンバーの様子を見るだけでも良いということになった。余裕があれば自己紹介をしてみてもいいし、一緒に梅子の好きな物づくりをしてみてもいい。それは本人の気持ち次第であることを伝えてもらった。

後日お母さんに付き添われて梅子が見学に来ると、メンバーたちは元気に挨拶をしてくれた。自分も見学に来た時は緊張していたから、出来るだけ明るい雰囲気で見えたい…そんな打ち合わせをしていたのである。梅子は緊張から一言も言葉を発することはなかった。お母さんと同じ、ゆったりした雰囲気だけれど、ガラスのように繊細な印象を受けた。身体をお母さんにくっつけて固く縮こまっていたので、また来てくれるだろうか…難しいかな…そう感じたという。

入会直後の様子

はじめて梅子に会った時、下を向いてほとんど話をしない様子だった。それは梅子が入会して間もない時だった。私は当時ボランティアのイラスト講師としてコスモに来ていて、フリースペースでの経験も浅かった。当時の梅子は、私が話しかけてもどう反応を返したらいいかわからないようだった。スタッフが促してくれて 3 人で一緒に絵を描いた。とてもきれいでかわいい絵だが、何の生き物もない森。表現された虚無感。何かつら

い経験をしていて、何も感じないように心を閉ざしているのかなと思った。ボランティアの私にできることは、お互いに好きなものづくりを一緒に楽しむことだったので、「お、きれいだね。風景を描けるなんてうらやましいなあ。もう一枚みてみたいなあ！」と無理のない範囲で活動に誘った。そして彼女の言葉にならない思い（どうしようかな。やってもいいかな。）は別のスタッフが表情で汲み取り、意思を尊重しながら緩やかに活動につなげていった。梅子は悩みながら水槽ときれいな数匹の魚を描いた。昨日水族館に行ったという。このようにして梅子は最初のうちは誘えば大体何にでも参加して慣れていった。後に梅子がこの頃のことを振り返っている。「コスモに来た時は緊張した。先輩たちがどっしりと居てくれて安心できたからコスモに通い続けられた」。

入会してから卒業まで

梅子は目が合わない、声が小さい、表情が少ない、発話が少ない、感想を語ることが困難など壊れやすいガラス細工のような存在であった。年上の一郎（仮名・当時 15 歳）は、みんなから少し離れたところで漫画を読んでいますごしている梅子に寄り添い、同じ目線になるようにかがみながら「〇〇してみない？」と聞き取ってくれていた。このようにしてスタッフと周りのメンバーたちは、梅子の言葉にならない願いに耳を澄ませながら活動に誘った。そして梅子がのびのびとすごせるように見守っていた。

当初の梅子の意思表示は、スタッフの背中を指先でつつんと突くことが主だった。不快なときは力が強くなるので、梅子なりの YES・NO だと解釈した。そんな梅子に作文は難しい課題だった。梅子に対して受容的なほかのメンバーたちも、自分の作文課題に取り組みながら梅子の表現を見守った。最初はスタッフと一緒に散歩に出かけて押し花を作ったり絵を描くことから始めた。続けるうちに、インタビューで YES と NO を答えるこ

とができるようになってきて、みんなに祝福される経験を重ねた。

安心感が増してきた

梅子は自分のペースで通う日数や時間を増やしていき、1年を過ぎたあたり（12歳）からは毎日通えるようになってきた。少しずつ笑うことやしゃべることも増えてきた。感情を表現できるようになった転機がある。農業体験で草を刈っていると、メンバーの一人が鳥の卵を見つけた。上空には親鳥が旋回している。サポートしてくださっている農家さんが「ありがたください」と提案。意気揚々と調理をしようとしていた。しかし梅子だけが黙って苦しみの表情を浮かべていた。

スタッフの一人が梅子の表情を見て緊急ミーティングを開いた。梅子は意見を言えず、議論のプレッシャーと命を奪うことへの葛藤からかさめざめと泣き出した。初めて梅子の強い感情に出会ったスタッフとメンバーは、「梅子のおかげで話し合うきっかけがもらえた」「ありがとう」と成長を祝福した。

その後「だるまさんが転んだ」のような遊びでは自然に大きな声をおなかから出せるようになり、身体を使う遊びをやったあとには感想も豊かになった。スタッフミーティングでは、精神的にも安心感が増してきていると分析した。

一日の振り返りをする「良かった会」では「楽しかった」だけでなく、「～して、美味しくて、～で楽しくて」など話せる内容が増えていった。ほかのメンバーに「言うことが変わってきたね。」と誉められると、嬉しかったのか安心したのか、背中にどかーつとのってきて嬉しそうにしていた。安心感と比例して身体的な接触が増えていった。

しかし、徐々に同年代の女の子メンバーが増えてくると、一緒におしゃべりがしたいけれど難しい…という壁に戸惑っているようだった。梅子と彼女たちの趣味嗜好が異なっていたのも壁となっていた。

苦手な話し合いに挑戦する梅子

入会から2年が経つころ（13歳）には先輩たちが卒業して同年代のメンバーが主になっていた。

先輩たちの受容的な雰囲気はなくなり、ミーティングで反応を返さずらく、特定の人がしゃべって終わってしまうことが続いていた。なかなか反応を返せない男の子のグループに対してスタッフが「梅子はちゃんと人の顔をみて聞いてくれている。聞く態度が重要なんだよ。反応がなくても一生懸命聞いてくれているのが伝わるよ。」と声をかけ、なんとか話し合いが成立する居場所作りを目指していた。

そんな中、梅子はミーティングで司会を頑張るなど、「参加者」から「場の主体」へとステップアップしていこうとしていた。みんなの前で声は小さいが「〇〇でいいですか？」と提案したりしていた。司会をしないときも、スタッフの背中にくっついて安心を確保しながら話し合いに参加するようになっていた。

有給スタッフになっていた私はミーティングの議題で、日常の活動をサークル化しようという提案を試みた。それは、どうにか梅子やほかのメンバーの新しい関係性が作れないかとスタッフ間で事前に相談してのことだった。梅子は共感して「みんなで何かしたいけど、それぞれしたいことが違うし、それは強制出来る事じゃないし…（サークルを作っても解決しないかも）」「（せっかくサークルを作っても）一人になったら嫌だし。」など葛藤を表現することができた。

梅子が主体的にコスモを良い場所にしようと、苦手な話し合いに挑戦していると感じた。しかしそれに対して同年代の男の子たちから反応がなかったのも、別のスタッフが「投げやりなリアクションは嫌だ」と伝えた。

梅子も男の子たちに視線を送った。祐二（仮名・14歳）が「自分の思っていることを話すのは勇気がいる。」と反応し、梅子は「うん、うん。」と共感した。「予定決めるときにやりたくない企画が出ても、やりたくないとは言わないよね。それでも、ちょっとやってみるだけやってみようってきめるけれど、結局やりたくないことはやらない」「でも毎日サークル活動だけになったら自分の好きなことしかやらなくなる」と、自分の思いをたくさん吐き出した。

智子（仮名・10歳）が「話し合いというもの

は嫌いだ」と言った時にも「分かるよ」と相槌を打ったり、八重（仮名・14歳）が「強制されたくないという怒りがある」と言った時も相槌を打ち、「男の子には恥ずかしかったり、嫌な時もあるよね」という。また、「やりたくないと思ったことも、ちょっとやってみたらいいかもしれないよね」といったり。何度も泣きそうな顔をしながら話した。この日、気持ちよく自分の思いを話せたためか、帰る時間になってもみんながおしゃべりしているところに残っていた。前を向きながらにこにこして、梅子の成長に胸がいっぱいになった。

梅子と私は夏の取り組みの活動報告作文をきっかけにぐっと距離を近づけることになった。梅子は気持ちを言葉にして表現するのに苦勞し、そのときはどのように作文を書いているのか途方にくれていた。

「わからなかったらわからないって言いからね」と前置きした上で私がインタビューした。「梅子はこのように感じているように見えたけど、どうかな?」と問いかけると小さな声で「…そうかも。わからない。」と私の目をまっすぐみて、信頼を表現してくれたことを鮮明に覚えている。

このようにして次第に自分の言葉で気持ちを語る事が出来るようになった梅子は、周りのメンバーから信頼され、徐々に対等なやり取りが出来るようになっていった。

入会して3年が経つころ（14歳）には、見学に来た子を活動に誘ってくれるなど徐々に「先輩」になっていった。自分が最初に見学した時の緊張を思い出して、配慮してあげたいという気持ちがある様子だった。

スタッフとの距離感の変化が

ミーティングでも、スタッフの助けなしに積極的に関わるようになっていった。人が話している時によく顔を見てくれるので、共感されているな、ありがたいな、と頼りにされる存在となっていた。それでも「ミーティングの時にシーンとしていて（反応しづらい）、（だけど）反応を返した人だけの合意になってしまうのが怖い（から反応したいとも思う）。」「自分以外の人は（賛成の）反応を返しているけど、（自分だけが）反対意見を



だすのは（恥ずかしいし）怖いよね。」など話してくれた。

同い年の大和（仮名）は普段は反応を返すことが苦手だったが、「色々な（思いを抱えた）人がいるということを考えて、それぞれにあった対応をしたい」と梅子の必死な姿を見て誠実な反応をするようになった。このようにして、反応を返すことをテーマに続けていたミーティングの成果もあり、少しずつ居場所全体が応答性のある空間になっていった。梅子にとってもコスモという集団に対して安心感が大きくなり、それまでほとんどぴったりだったスタッフとの距離感も変化した。

農業体験の稲刈りでは集中して作業に取り組み、自分から刈りたいところを探して刈っていく。スタッフから離れていた方が気楽そうだった。淡々と作業をこなすことで「無心になれた」とのことだった。調理や稲刈りの作業では「その作業はできない」と主張し、自分にできることで最大限やろうとする自意識が育ってきた。自信のなさから行っていたスタッフへの確認も省くことができ、自分から作業を探すことができた。いつも周囲のことを気にしたりやりたいことを大きくは主張し

たりしない梅子にとっては大きなステップアップだと思った。これからはイエス・ノーを問うのではなくではなく自己決定を問うていくのが梅子の願いであろうと考えた。

「先輩」が板についてきた梅子

入会から4年経ち（15歳）同年代のメンバーの大方が卒業し、智子（12歳）以外は新しいメンバーになっていった。その頃、韓国との交流事業が立ち上がる。きっかけはふらっとコスモにやってきた韓国の不登校の女の子。彼女の「私は自分自身に満足しています」の一言に衝撃を受け、梅子たちメンバーの手で助成金を申請して韓国へ行った。

準備のミーティングは梅子がリーダーシップをとり「（彼女がどんな暮らしぶりをしてるのかなど様々なことを）知りたいんだよね！」と、気持ちの部分でもみんなを引っ張ってくれた。

「実際に韓国へ行ってみると、日本の人も韓国の人も学校や受験で同じ事、共感できる事がたくさんありました。言葉も違うけど、一緒にご飯を食べたり、歌ったり、遊んだり、国が違って、分けるのではなく、一緒に楽しく過ごすことができると思いました…（略）」と初めて1人で作文を書いた。安心の対象がコスモを超えて社会へ大きく広がるきっかけとなったのだ。

「先輩」が板についてきた梅子は、年下メンバーの面倒を見てくれ、必要なときにそばにいてくれるようになった。梅子の表情も全体的に柔らかくなった。度々パニック状態になってしまう大貴（仮名・11歳）と一緒にいてくれるので、大貴はすごく梅子になつき、梅子も大貴のことをよく見て気遣っているようだった。私たちスタッフにとっても梅子の存在がとてもありがたいものになっていった。智子も梅子の様子を見習って年下の子達への接し方を真似ているようだった。

こんなこともあった。光（仮名・9歳）が、ミーティングに参加していない様子を見て、ついつい感情的に説得してしまう私を制するように、「フリースペースのフリーとは何だろう」「予定を決めたいわけはね・・・」などと根気よく、相手の気持ちを考えて伝えてくれた。最終的に、光は梅子の提案を受け入れて一緒に予定を立てることができた。

入会から5年経つ頃（16歳）、通信制高校に入学。コスモに通いつつ単位を取得することになる。梅子と智子の思春期メンバーには落ち着いて知的な好奇心を満たせるようなプログラムを提案した。

まずは読書サークルを作ることにした。二人とも夜遅い時間になるにもかかわらず毎回楽しみにしていた。他にもOBにギターの講師を頼んで練習したこと等もいい刺激になったようだった。

通信制の課題のために家にいることが多くなったのもあり、コスモの卒業を意識し始めるようになった。そこで、NPOの事業であるベーカーリー研修などを薦め、コスモ以外の場所での活動が増え始めた。花見に誘われるような新しい関係性も生まれていった。

進路、現在の様子

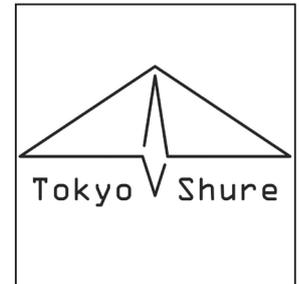
コスモを卒業した梅子は自分のペースで通信制高校を卒業。現在は短大で学んでいる。たまに後輩たちの活動報告を聞きに来てくれており、卒業後のロールモデルとなってくれている。

初めて会ったときに下を向いて会話をしなかった梅子は、今ではたくさんの人と接するようになった。こちらから質問しなくてもどんどん自分から話をしてきている。それはコスモで徐々に安心できる領域を拡張してきたという学びの賜物である。私との雑談を終えて、笑顔で「雑談からでないと話したいことが話せない」と語り、自分の考えの整理の仕方についても理解が深まっている様子だ。



東京シューレ Tokyo Shure

- 【団体名】 特定非営利活動法人東京シューレ
- 【活動地域】 東京都北区・新宿区・千葉県流山市
- 【会員数】 360名（ホームシューレ、シューレ大学含む）
- 【スタッフ数】 常勤15名、アルバイト・ボランティア・講師
多数



【活動理念】

東京シューレは、登校拒否の子ども達が増える中、子どもたちの学校外の居場所・学びの場として1985年にスタートしました。フリースクール活動の他に、家庭を中心に育つ子どもたちを支えるホームシューレ、通信制高校と教育提携した高校コース、18歳以上の人たちの探求の場であるシューレ大学と合わせて360人ほどの会員がいます。通ってくる子どもたちは関東が主ですが、全国各地に会員がおります。さらに親の会や公開ゼミ、相談活動やひきこもり出会いのサロンなど多様な活動も行っています。1999年に東京都よりNPO法人の認証を受け、NPO法人として活動しています。常勤のスタッフは15人です。その他にアルバイトスタッフ、ボランティアスタッフ、講師など多くの人に関わっています。

東京シューレは、開設当時から子どもの立場に立ち、その子の個性を大切に、多様な成長ができるよう次の5つを柱にしてやってきました。

- ・ほっとできる居場所：フリースクールは子ども・若者たちが安心していられる居場所です。「居場所」とは、自分が自分であってよいと思えて、はじめてそう感じられると考えています。
- ・「やりたいこと」を応援する場所：やりたいことを大切にして、どう実現できるか一緒に考えます。やりたいことはエネルギーが出るし、困難に対しても解決を考え、達成感があります。子ども・若者たちが、やりたいことの中で自分らしく成長していくサポートをします。
- ・自分で決めることを大切に：自分で自分のことを決めることが尊重されます。週何日通うとか、いつ来ていつ帰るか、どのプログラムに参加するかなど、自分にあった過ごし方をすると共に自己決定する力を培い、自分を深めます。
- ・子どもたちで創る：子ども・若者たちが意見を出しあい、企画・運営に参加、決定、実行し、時に変更しながら学び、成長する場を自分たちで創っていきます。基本に毎週のミーティングがあります。
- ・違いを尊重する：一人ひとり、個性も育ってきた状況も違います。違いを受け止めあつて、お互いを尊重しながら、育ちあつていく場です。

<フリースクール>

不安な気持ちが強かった M さんの例

現在、25歳になる M さん。学校に行かなくなったのは中1の6月でした。当時、私立の中高一貫校に通っていましたが「この学校生活が6年間も続くのか」と思ったら、つらい気持ちになったそうです。

小学校は楽しく過ごしていましたが、全国統一テストを受けたことをきっかけに受験のための塾に通うようになりました。本人は友だちと同じ公立に行きたかったのですが、それを親に言えず、そのまま受験・入学になりました。6月に風邪で休んだあと、登校しようとしたとき、電車の中で苦しくなり目の前が真っ白になりました。心療内科では「パニック障害」という診断が出たのですが、薬を飲みながら、母親と電車に乗る訓練をして、また乗れるようになり、その後は頑張って通いました。夏休みになって、「本当は私立を受験したくなかった。みんなと同じ中学校に行きたかった」と母親に打ち明け、公立に転校することになったのですが、4日でまた休むようになりました。

本人は自殺を考えるようになり精神的に不安なっていました。そんな中、本人が「フリースクール 東京」とネットで検索して東京シューレを知り、親子で体験見学。自分のペースで5日間ほど見学をして入会しました。ゲームやおしゃべりをしていてもいい自由な雰囲気と、いつ行っていつ帰ってもいいというのが決め手だったそうです。

シューレに入会した後も、またパニックになるのではと車で通うことに不安があり、毎日の行き帰りを母親が付き添ってきていました。そんなつらい状態の中だったのでシューレにいても感情の波は激しく、明るかったり落ち込んだりしました。スタッフは、様子を見つつ、本人のそばにいるようにしました。

スペースの中で一緒にいる友人が出来てくるとスタッフと離れても安心して楽しく遊ぶようになりました。

不安が強くなったり、弱くなったり揺れが大きい中、親に強く言われたことをきっかけに外に出るのが怖くなってしまいました。家の中にも不安が強く、電話やメールがスタッフに頻繁にくるようになりました。多い時は二人のスタッフ宛に交互にかかってきました。どう不安なのか、何がつらいのかという話をしながら、気持ちの整理もしつつ、好きなことや興味のある話をして気持ちをそらすようにしました。電話がかかっても無言でつながっているだけのこともありました。

それが2～3週間続きましたが、いつでもつながれることに安心して、またシューレに少しずつ通い始めました。

親の方は、少し元気になってくると、もう一人で通えるようになるだろうと期待してしまい、一緒に電車に乗る距離を減らし自分で通える距離をのぼそうとしてしまったり、勉強・将来のことなど匂わせてしまったりしました。それを感じ取った子どもは、だんだん不安が強くなって過呼吸が多くなっていきました。本人は、「親はわかってくれない、でも本音を話すのは怖い」という気持ちがありました。スタッフは保護者と電話や面談などで保護者の気持ちを聞きながら、本人の気持ちも伝え、ゆっくり本人のペースでいきましょうと話しました。親が理解しようという姿勢になると本人も楽になっていったように思いました。

シューレでは彼女は、趣味の合う人や家が近い人とも仲良くなり、工作したりテニスに行ったり、お茶を飲みながらおしゃべりを楽しんだりしていました。ただ夕方になると不安から急にパニックになり、軽い過呼吸を起こすこともありました。それはつらい気持ちや淋しい時のサインなので、そばにいるようにしました。そういうこともシューレの友だちと一緒にいる時間が増えてくると減っていきました。

だんだんとやりたいことが増えていき、パソコ

ンが得意だったので新宿シュレのホームページ作りやパン・お菓子、アカペラコーラスなどの講座にも参加するようになりました。シュレの周年行事や季節のイベント、フリースクールフェスティバルなどの実行委員会に参加するようになり、自分で企画を立てて創り出す楽しさを知ったことが、その後の活動の原点になっているとのちに話してくれました。

中3のクリスマスプレゼントにルービックキューブをもらったことがきっかけで、タイムを短くするために練習を重ね、ルービックキューブの大会にも出場しました。日本国内の大会で女子2位になったこともありました。大会の運営にも関わるといなり、シュレでの異年齢での関わりも大きく自分に自信が持てるようになりました。

ところが、中学を卒業して、シュレの高等部に通いながらバイトをしていたら、バイト先の人やキューブの人たちに「高校行ってないの、将来どうするの?」と聞かれるようになったそうです。いやな気持ちになったけど、本人なりにそれをきっかけにいろいろ考え始めました。友人やスタッフなどいろんな人に相談して、都立のチャレンジスクールへ行くことに決めました。高校受験は、中学受験の時のトラウマが消えなくて苦しかったようですが、作文・面接だけだったので、緊張しながらも乗り切り、18歳で入学しました。

中3の時あせって高校に行かず、ゆっくり考えて、自分で納得してから高校を決めたので落ち着いて進むことができたのではと思います。しばらくは、シュレに籍を置きながら高校に通っていましたが、入学して一年経ち、本人も大丈夫と思い、シュレを退会しました。

本人には、小さいころから医療関係の仕事に就きたいという希望がありました。

高校に通っていた頃「ME（臨床工学技士）」という仕事を知って、卒業後はMEになるため専門学校に入学しました。基礎学力が足りず、小4レベルの計算ドリルからスタートです。夜遅くまで学校に残って、国家試験の過去問を何十回も解き



ました。自分が心の底から「なりたい」と思ったことにはこんなにも頑張れるものかと本人も驚いていました。

現在は公立病院でMEとして働いて2年目。まだまだ先輩に怒られながら、やりがいがある日々を送っています。ICU（集中治療室）勤務で機械の点検ひとつとっても患者さんの命に関わるプレッシャーや緊張感の中にいますが、大好きな医療機器に囲まれているので苦にならないそうです。

東京シュレ30周年記念に刊行された『東京シュレOB・OG100人インタビュー』の中で、「私には学校に行かないことが必要だったと思います。自分らしく生きられるのもシュレがあったから。私が自発的に動き出せるようになったのは、シュレでの経験が生かされているのだと思います」と語ってくれました。

フリースクールには、いろんな子どもたちが通ってきています。スタッフにはマニュアルがあるわけではなく、一人ひとりの子どもに合わせて関わることができます。子どもたちが安心して居られるために、この子はこういう子だとレッテルを貼らず、一人の人間として尊重すること、ありのままの姿を丸ごと受け止め寄りそいながら、その子が自分らしく成長していくサポートをすることができる場所がフリースクールだと思います。

※フリースクール全国ネットワークが主催する合同文化祭。毎年、複数のフリースクールのメンバーが集い、企画・運営をしている。

<ホームシュール>

ホームエデュケーションを活用した S 君の例

東京シュールは、1993年11月、家庭を中心に学び育つ「ホームエデュケーション」の支援部門「ホームシュール」をスタートさせました。フリースクールとは違い、全国どこにいても（外国でも）参加することができます。この22年間で、およそ2千世帯が参加してきました。

ホームシュールは、ホームエデュケーションに関するサポートとして交流支援・学習支援・保護者支援などを行っています。具体的には交流支援として「会員交流誌の発行」「専用のWEBサイトSNS・ショートメールSNSの運営」「オフ会・各地のサロン・全国合宿等の交流イベントの開催」等を実施しています。学習支援としては「学習サポート・高認サポート」「美術・イラストコースの開催」「通信制高校と提携した専用高校コース」等を実施し、保護者支援としては「保護者向け会員誌の発行」「保護者専用のWEBサイトの運営」「個別サポート」「相談」等を実施しています。

現在のホームシュール会員は約190世帯です。ここでは、2007年7月に小学6年生（11歳）でホームシュールに入会したS君のケースについて紹介しようと思います。

S君は小学4年生（10歳）の11月後半から「もう行きたくない」と学校を休むようになり、年明けに少し登校したものの続かず、不登校になりました。家の外へほとんど出ず、保護者は公的な家庭支援相談を受けたり、心療内科の発達外来を受けたりしていました。

そんなとき、保護者が東京シュールの本を読んでホームシュールを知り「少しでも外の人たちと関わって欲しい」思いから、本人に説明をしたうえで入会しました。入会してもしばらくは引きこもり状態で、ホームシュールの交流活動にも参加しませんでした。しかし保護者はホームシュール活動を通じてホームエデュケーションについて学びはじめました。S君がホームエデュケーションで成長した最初の大きなきっかけは、この「保護

者がホームエデュケーションに触れたこと」です。

2008年4月には中学生となりましたが、不登校は続きました。ホームシュールの交流活動にも参加していませんでしたが、本人より先に保護者が他の保護者と交流するようになりました。保護者は、家庭の中で落ち着いて生活することができるよう気を配っていました。

2010年6月、ホームシュールは文科省の委託による実践研究事業に参加し、その中で「美術コース」という絵画教室形式の共同体験事業をスタートさせました。このとき、開催場所に近いところに住んでいたこともあり、はじめて親同伴で見学に来ました。最初に出会ったとき、S君は緊張が強く、強度の吃音も見られ、背骨もS字型に湾曲していました。

参加を決めて月に2回通うことになりましたが、最初の数か月は全く絵を描くことができず、他の参加者と会話することもあまりなく、講師と将棋ばかりしていました。この頃は美術コースのみが外出機会でした。一人で留守番・移動できず、常に母親が付き添っていました。

2010年秋には、徐々に講師やスタッフ、参加者と雑談や会食ができるようになりました。このころ、母親と相談し、一人でバス・電車に乗れるように練習をサポートしました。その結果、美術コースの往復のバス・電車移動が一人でもできるようになり、留守番も可能になりました。

子どもの変化を見てとった保護者は、保護者同士で開催している地元のホームシュール自主サロンに親子で参加するようになりました。月1回のこの自主サロンに参加し、S君はゲームを通じた友人ができました。この「いっしょに遊べる友人ができたこと」は二度目の成長のきっかけでした。

2012年4月、S君は、東京シュールが通信制高校と提携し開いた学習センターのホームシュール

レコースに、第一期生として入学しました。入学当時、彼はひらがなさえもよく書けませんでした。パソコンのキーボードばかりで、実際に字を書く経験がほとんどなかったのです。

そこで、百元ショップで売っているひらがな練習帳でひらがなの練習をすることにしました。彼は短期間に練習帳を終え、鉛筆の持ち方や運筆を学びました。つぎに書店で小学3年生の漢字練習帳を買ってきて、漢字を書く練習をしました。これも1か月ほどで終わると、だいぶ字を書くことに自信が持てるようになりました。パソコンは堪能でしたから、漢字そのものは理解していたのです。次に任天堂DSという携帯ゲーム機の「漢検DS」というソフトで漢字に関する学習の速度アップを図りました。ゲームの要素を採り入れたこのソフトにより、彼は1か月ほどでコンスタントに漢検4級をクリアできるレベルとなりました。

S君は高校入学と同時に遅れながら字を書く練習をスタートしたためか、高校2年次の「書道」の実技では、草書・隸書・行書・楷書などの字体を書き分け、字のバランスも素晴らしく、他の生徒を上回りました。「自分も学ぶことができた」ことは、彼の成長の三度目の大きなきっかけでした。

2013年4月には、S君はホームシューレの年長者支援のひとつ「ホームシューレインターン」に採用されました。主に交流誌の編集や会員どうしの交流のサポートをするのが仕事です。彼はこのインターンで、その後も長く付き合いの続く友人を持つことができました。編集会議等で自分の意見を言う機会が増えたためか、吃音がどんどん減り、会話に不自由しなくなりました。

2014年の秋には「アルバイトをしてみたい」と言いだし、2～3か所面接を経て、コンビニエンスストアに採用されました。思ったより早くレジや接客を任されたり、タバコの銘柄が覚えられずに苦労したりしながらも、管理職から目をかけられるようになり、3か月もすると、すっかりアルバイトが板につくようになり、複数の店舗をまわる仕事を任されるようになりました。この頃には体力もつき、かつて大きくS字に湾曲していた



背骨もまっすぐにのび、背も伸びました。「ずっと小6のときに買ったダウンを着ていたが、久しぶりに自分のバイト代で買い替えた」と言っていたのを思い出します。アルバイトの経験は彼に「自分は社会でも通用する」という自信を与えたようで、これは彼の成長の四度目のきっかけです。

2014年に高校3年次生となってからは、進路を考えるようになりました。いろいろ相談に乗り、検討した結果、専門学校の機械科（4年制）を受験することになりました。自己推薦で合格すると、彼は入学後に備え、ホームシューレの学習サポートを使って、遅れている数学Ⅰの学習にとりかかりました。この頃には吃音はほとんど見られなくなり、ホームシューレの会員交流誌にアルバイトの体験談を投稿したりしていました。アルバイトでタバコを買いにきた高校生を追い返したという武勇伝でした。

2015年4月からは、予定どおり専門学校の機械科で勉強をしています。欠席はほとんどなく、人間関係も良好で、強いていえば、数学がまだ不十分ということです。授業が早く終わった日や夏休みにはOBとしてホームシューレのインターン活動に顔を出し、先輩として関わっています。

ホームエデュケーションと言いますと、とかく「家で勉強すること」のような単純なイメージを抱かれることがありますが、実際には、家庭が安心できる環境をつくり、子どもの主体性を育て、他者との関係や学びや社会で生きていくための自信を育てていくという、幅広い子育ての基本を実践しているのです。

ビーンズふくしま Beans Fukushima



【団体名】 特定非営利活動法人ビーンズふくしま

【活動地域】 福島県の県北、県中地域を中心に活動

【会員数】 17名

【スタッフ数】 常勤2名 ボランティア5名（フリースクール部門のみ）

【活動理念】

ビジョン：生きにくさを抱える子ども若者が自ら望む姿でつながることができる社会をつくる。

ミッション：子ども若者の教育・労働・福祉との接続機会の喪失によって起こる「社会から孤立問題」を解決する。

【活動内容】

フリースクール・若者サポートステーション・ユースプレイス事業・心の相談室（カウンセリング）・子どもの貧困対策支援事業・被災子ども支援・福島県ひきこもり支援センター等



フリースクール運営に興味を持つようになった A 君の例

入会前、入会時の様子

ビーンズふくしまでは、見学希望者に対し、無料で施設見学を行っている。電話で日程を予約してもらい、施設見学当日は、フリースクールの説明、お子さんの現在までの状況や課題などを聞き取り、施設の見学を行う。その後、お子さんの希望があれば、フリースクールのプログラムを無料で5回まで体験することができる。5回の体験の後、お子さんの入会の意味確認、保護者さんの入会の意味確認、フリースクールの受け入れ体制の整備を行い、入会手続きという流れになっている。

Aくんの施設見学時、保護者さんへの聞き取りを通し、理由は分からないが今本人が学校には行きたくないと言っているということ、学校から病院の精神科を勧められ受診し、その病院から、フリースクールを勧められ見学に至ったという状況を把握した。

入会直後の様子

Aくんは、見学及び体験を終え、入会に至るが、緊張度合いが高く、入って間もないうちは、自分の座る場所を決められず、不安そうにしていることもあった。本人が、「ここは自分がいてもいい場所なのだ」という安心感を得られるよう、スタッフは、他の子どもとの適度な距離の場所に、「ここ座っても大丈夫だよ」と声をかけ、スタッフも近くに座るなど、安心できる空間づくりに努めた。

また、初めのうちは、年の近い子と話したり、思ったことを言葉にするのが苦手だったため、まずはスタッフや年の近いボランティアなど、本人が安心できそうな大人の方から、本人が興味のある話をしたり、本人が話してくれた声をしっかりと拾ったり、一緒にゲームや簡単な作業をすることで関係を築いていき、人という不安感が少しでも解消できるように動いた。

そして、テレビゲームやトランプなど、特別何か話さなくてもいいことに誘いかけ、少しずつ年の近い子どもとも関係が作れるように心がけた。

本人はトランプタワーを作ったり、部屋の奥で携帯電話を操作しながらひとりで過ごす時間も多く、本人にとってはその時間も息を抜くことができる大切な時間でもあると考え、本人がその時間のプログラムに興味がないときは、無理に誘ったり、誰かという時間を強制するのではなく、本人が居たい所で、やりたいことをしていいんだということを伝え、本人が1人で安心して時間を見守っていた。

入会からしばらく経ち、フリースクールという空間に安心した頃になると、他の子どもたちとも自然と打ち解け、本人が自分でやりたいと思うことを提案するようになった。どんな小さな声もなるべく拾い、「面白そうだね。一緒にやってみよう」と声をかけ、「やってみたい」という思いが、「できた」という達成感、「またやってみたい」「違うこともやってみたい」という思いに変わるようにサポートした。

初めのうちは保護者の方の送迎でフリースクールに来ていたが、自信が少しずつ付いてきたこともあり、行きも帰りも電車を使って自分で通えるようになる。初めのうちは週に2、3回ペースでの利用だったが、入会から3ヶ月程たち本人がやりたいことを提案するようになってからは、毎日利用するようになっていた。

フリースクールに入会してから

1. 就労体験

ビーンズふくしまでは、仕事の体験を通して、子どもたちの興味関心の幅を広げたり、その達成感を感じてもらったり、地域の人達とのつながりを感じてもらえればというねらいから、資源回収や宅配花屋さんなどの就労体験を行っている。

Aくんは、少しずつフリースクールに安心感を得、自信も芽生え始め、「みんなもやっているし、楽しそうだな」という思いもあり、この就労体験活動に参加を希望した。この活動の中で、「自分もできた」達成感が得られるように、雑誌などを縛る、荷物を運ぶ、花を選ぶなど、本人にとってやりや

すい作業から行ってもらった。そして、少しずつ難しい作業や外部の方への挨拶など、ハードルの高い仕事をスタッフと一緒に体験することで、本人のペースで出来ることを増やしていった。

また、作業にも十分に慣れ、後輩も出来てきた頃には、本人が教えることが大変うまいという長所があったため、後輩たちに作業を教える側としての役割も担ってもらった。この活動を通し、多くの地域の大人と関わることで、作業が上達していったことはもちろん、初対面の人とも会話ができる社会性や、人に教える技術、「自分もできる」という自己肯定感を伸ばしていったように思う。

2. 他の子どもとの関係作り

フリースクールの環境にも慣れ、同年代の仲間も出来てきた頃、優しい性格のAくんの周りには、人が集まってくる印象があった。その中でAくんも楽しさや心地よさを感じているように見えたが、時には、自分は疲れているのに相手の勢いに巻き込まれたり、頼まれると嫌と言えず相手に合わせたりして、疲労している様子も見られた。

スタッフは、初めのうちは、本人が人といることによって疲労しているときは、他の子と少し離れたところで「ここで少し休まないかい？」と誘ったり、「1人になりたい時は静かな部屋に1人でいてもいいからね」と、人と無理にいたなくてもいいということを伝えた。また、「自分がやりたくないことは、断ってもいいからね」ということも少しずつ伝えていった。

そのうちに、Aくんは、疲れているときは、他の子と適度に距離を取り、一人で休む時間も大切にできるようになり、疲れている時に誘われた時も、「今は自分の時間を大事にしたいからごめんね」と相手に優しく伝えていた。

3. ミーティングやスタッフの仕事について 興味を持つ

フリースクールビーズふくしまでは、毎日決まったプログラムがあるのではなく、週に一度開かれる「週ミーティング」の中で、次週の予定を決めている。大人も子どもも同じく役割を担い、みんなが参加者として、ミーティングを作っている。

Aくんは、入会当初は、人前が出るのが苦手で、司会なども率先してやるということではなかった。後輩も増え、本人がフリースクールの中では年長者になってきた頃、スタッフが受けてきたファシリテーション研修に興味を持ち、学んでみたいと話す。そこでスタッフは、研修で学んできた内容を、子どもたちも理解しやすいような形に変え、「ファシリテーション講座」を開催した。

その中で、良いミーティングをみんなで作るにはということを実践を交えながら子どもたちに伝えた。その講座の後、Aくんを始め、子どもたちは、みんなで良いミーティングを作るため、相手を思いやるミーティングを意識するようになった。

元々周りに気を遣い、話し合いをまとめることが好きでもあり、上手でもあったAくんは、率先して司会を務め、他の子どもたちは彼の背中を見て、彼を真似するようになっていった。

最初は意見を型にはめて、綺麗にミーティングを進めるのが好きと言っていたが、次第に、違う人の違った意見があることに興味し、それらを大切にしながらまとめていく楽しさを感じるようになったと話していた。

Aくんが、高校生になってからは、フリースクールスタッフの仕事にも興味を持ち始める。子どもたちの合宿企画の準備のため、スタッフが手続きや下見のために合宿所を前もって訪れようとした際、「自分たちの知らないところで、どんな手続きがされているのかを知りたい」と、Aくんが同行を希望した。

また、普段の生活の中でも、フリースクールの雰囲気作りやプログラム作りに関して、スタッフがどんな工夫を行っているのかに興味を持ち出した。スタッフは、その工夫を伝えたり、本人が希望すれば本人ができそうな役割をお願いするなどし、スタッフの仕事に触れてもらった。

また、フリースクール全国ネットワークで毎年開催されていた、フリースクールスタッフ養成研修講座に参加してみないかと誘うと、本人が参加を希望したため、スタッフと一緒に参加した。「初めて知ることへの驚きなどもあったが、ワクワクすることが多かった。自分が将来何をしたいのか考えるきっかけになった。」と感想を話していた。

4. 進路支援と学習支援

ビーンズふくしまでは、年度初め、夏休み明け、冬休み明けの計3回、子どもたち一人ひとりと、個別面談を行っている。フリースクール活動の中でどんなことをこれからやってみたいか、日常で何か不安に思っていることはないかを聴き、自分たちの成長に気づいてもらうため、日々の中での子どもたちの成長を本人たちに伝えている。

また、その子が必要だと思った時に、これからの進路に関する相談も行っている。進学や復学、就職ありきではなく、子どもたちが今どう思っているのか、どうしたいのかという思いを聴くことを第一に考えながら、必要な情報の提供や目指す進路に向けたサポートなどを行っている。

学習支援に関しては、「学びタイム」という学習の時間を、1日1時間とっている。その時間は、子どもたちがやりたい教科の教材を持ち寄り、そこにスタッフがついて学習をしている。また、子どもたちに学ぶことの楽しさを感じて欲しいという思いから、クイズやゲームなどの子どもたちが興味を持ちそうなレクリエーションを使って、参加しやすい工夫を行っている。また、子どもたちの自己決定を大切にするため、この時間も、強制参加ではなく、「やりたい」という子どもたちの意思に任せている。

Aくんが中学2年生の頃、スタッフとの面談の中で県立の定時制高校に進学したいという意思や、勉強のやり方がわからないという不安な思いもあるということを伝えてくれた。

スタッフはその思いを受け止め、不安な気持ちが少しでも軽くなるようにと、「フリースクールの学びタイムに参加してみないかい」と提案した。本人がやってみみたいということだったため、次の日から学びタイムに参加することになった。

初めのうちは、教科書通りに進むのではなく、まず学習することへの興味・関心をもってもらい、「また学びタイムに参加したい」と思ってもらうため、本人の好きな教科の得意な所から始め、「さんずいの付く漢字をどっちが多く書けるか勝負しない？」など、スタッフとゲームをしながら、学習を開始していった。

また、スタッフもいつも正しい回答を出して間違えてはいけない雰囲気を出すのではなく、あえ



て面白い回答を出したりすることで参加しやすい空気を作っていた。初めは参加する日数は少なかったが、Aくんが中学3年生の頃には、高校受験をするという目的も確固としたものになり、毎日学びタイムに参加していた。

高校受験にあたり、どんな種類の高校があるのか、試験はどんな流れで進むのかなど、その仕組みに関して知りたいという希望があったため、高校受験説明会を行った。受験のシステムを伝えると同時に、フリースクールの卒業生や、スタッフ・ボランティアが「どうして自分のその進路を選んだのか」、「どんな不安があり、どう解消していったのか」などの体験談を聞く機会を設けた。

Aくんは、中学校3年の頃、週に1回学校に行き、担任の先生と会っていたが、受験に向けた面接練習や、小論文の練習をフリースクールで行いたいと希望したため、学びタイムの時間と合わせて、そちらの練習も行った。初めは高校への志望理由を書くのに大変苦労をしていた。

スタッフが、「高校に行ったら何が楽しみ?」、「その高校を見たときは最初どう思った?」など、本人にとって答えやすそうな質問をしながら、本人が答えることのできたものを箇条書きにしていった。それをスタッフもサポートしながら文章にし、志望理由をまとめていった。

面接練習の中で、「学校に行きづらくなったきっかけは?」などの答えにくい項目もあったが、「今振り返ってみても明確な理由は分からないが、学校の雰囲気は苦手だったからだと思う。しかし、学校に行かなければ、フリースクールに来ることもなかったし、行かなかったことは後悔していない」としっかりと自分の言葉で返していた。

高校受験に望み、本人が志望していた高校に合格。年度の初めは、気を張りながら毎日登校していた。6月に入ると、高校という新しい環境で気

を張っていたこともあり、フリースクールでも疲れた表情を見せるようになる。人への気疲れや、部活の大会へのプレッシャーなどが重なり、少しずつ高校への足が遠のくようになる。

フリースクールでは、「学校に行けるように」ではなく、本人が心の中ではどう思っているのかを一緒に考えられるよう、その思いを聴くことを大切にした。自分の気持ちを言葉にするのが苦手ということで、「もやもやする」、「心が揺れる」などの漠然とした言葉も本人の大切な思いとして受け止め、その表現がどこから来るものなのか、答えやすいよう心がけながら質問し、本人が心の中でどう思っているのか、本人自身が気づけるようサポートしていった。

スタッフとの話の中で、高校に通うことについて、親や学校の願いをプレッシャーに感じると同時に、「高校に何故行くのか」、「自分自身のこれからについて」などを自分のペースで、考えたいという思いがあるということ話す。

無理して高校に通うのではなく、本人がどうしたいのかを1年かけてゆっくり考えることにし、高校は休学することにした。一時は通信制高校への転入なども考えたが、次年度、同じフリースクールに通うメンバーも自分と同じ高校に入学することもあり、もう1度同じ高校へ改めて通うことを決めた。

その後は、一緒に通うメンバーと支え合い、4年間の高校生活を送った。また、やってみたかったアルバイトにも挑戦する。高校3年時、学校やアルバイトにも慣れ、自分の中で大丈夫だという自信がつき、フリースクールの卒業を決めた。

5. 保護者への支援しくみ

ビーンズふくしまでは、年に数回、「おやまめの会」という保護者会を開催し、子どもたちの普段様子を共有したり、保護者の方も一緒に運営について考えたりしている。また、年度末に個別の保護者面談を実施し、子どもの様子や進路についての共有を行っている。Aくんの保護者の方とも、保護者面談を実施し、普段のAくんの様子を共有し、高校受験の際には、どう連携していくのかなどを話し合った。

6. 子どもが在籍している学校との関係

高校受験にあたり、Aくんの中学校の担任の先生、Aくんの保護者、そしてAくんの本人の希望もあり、受験の際に必要な内申書の参考にするため、スタッフが中学校を訪れ、担任の先生とスタッフとのミーティングを行った。

Aくんのフリースクールでの活動の様子や、フリースクールでの学習時間、スタッフから見えるAくんの長所などをまとめた書類（事前に本人と保護者の方に確認してもらった）を提出し、高校受験に関して今後どう連携していくのかなどを共有した。

共有が終わると、担任の先生は、「Aくんがこんなに楽しそうに活動をしている様子を感じ、フリースクールが本当に彼にとって、安心して輝ける場所なんだと実感しました。私が行くと本人が緊張してしまい、本人の居場所を邪魔してしまうので私はフリースクールの様子を見に行きませんが、これからもよろしくお祈いします。受験の手続きに関して、今後も連携させてください」と話していただいた。

7. 子どもの進路、あるいは現在の様子について

高校卒業後、4年生大学に入学し、福祉や心理学について学んでいる。高校の時に始めたアルバイトも継続し、働きながら学問に励んでいる。また、卒業したフリースクールでボランティアを行いたいと希望し、フリースクールの子供達と関わりながら、自分の経験を活かし、子どもの気持ちが一番わかるボランティアスタッフとして、居場所づくりの一端を担っている。

Aくん本人に、フリースクールで何を学んだのかを聞いてみると、「人見知りという性格は変わらないが、自分も疲れず人とうまく関係を作ることができるようになった。また、あいさつや、人との会話など社会性の基礎や、人前で漫才を披露するまでの自信、そして、人の様子を見て、その人のことを思いやったりすることを自分の長所としてできるようになった」と話す。安心して自分を出してもいいという環境、安心して居られる仲間、フリースクールでの多様な体験、スタッフや大人の姿、保護者の方や学校の先生の支えが、A君の成長へとつながったのではないだろうか。

訪問型フリースクール

漂流教室

Hyoryu Kyoshitsu



【団体名】 訪問型フリースクール漂流教室 (通称：訪問と居場所 漂流教室)

【活動地域】 札幌市内および近隣地域 (石狩・江別・北広島など)

【会員数】 30名

【スタッフ数】 常勤3名・ボランティアスタッフ40名

【活動理念】

漂流教室にはカリキュラムがありません。年齢制限也没有ありません。学校に行っている、行っていない、障がいのあるなしも関係ありません。子どもの生活に学校以外の場所があまりにも少ない。それにより疲弊している子どもが多くいます。私たちは子どもたちが安心して話せる状態と場所をつくります。

【主な活動内容】

1. 訪問支援

週1回1時間コースと週1回2時間コースがあります。週1回1時間、2時間程度を共に過ごし、ゆつくりと関係を作っていきます。漂流教室では訪問に目的をつくりません。「ただ会う」「ただいる」ことを大事にしているからです。その日その週にあった事や、いつも考えていることを話してみたり、一緒に遊んでみたり、黙ってお互いに好きなことをしたりしています。

2. フリースペース (漂着教室)

火曜日から金曜日、朝9時から夜8時まで開いています。コースもカリキュラムもありません。毎日来ても、たまに来るのでもかまいません。好きな時に来て好きな時に帰れます。何を

するかは利用者と相談の上で決めます。カリキュラムがないので、自由に時間を使うことが出来ます。「英語を教えてほしい」「絵の描き方を教えてほしい」、そういった利用者の希望があれば、スタッフが教えたりもします。すべてにおいて利用者主体で進めていきます。

毎日朝から来るのもよし、何処か出かけてみたい時に行くのもよし、学校が終わった後にちょっと寄ってみようかなというのでも大歓迎です。

入会直後の様子と流れ

漂流教室では、電話やメール等で相談を受け、スタッフが説明に伺うか相談者の方から事務所に来てもらい、詳しい説明を受けてもらいます。

スタッフが家に行く場合、自分の家 (領域) に知らない人が急に入ってくるということは子供にとってストレスになるので、必ず、事前に子ども (当事者) にスタッフが家に来ることの了承を得てもらいます。それは、例えば「こういう人が来るけど、お母さんが話をするから呼んでもいいかな」程度のもので大丈夫です。

入会の際に気をつけている姿勢や工夫

保護者への支援として、漂流教室では以下の仕組みがあります。

1、問合せ時からの電話相談

問合せ電話そのものが、不登校とそれを巡る諸問題についての相談となり、複数回の相談を行うことも多いです。

利用を前提にした問合せが来ることもよくあるが、漂流教室の利用は当事者の同意がとれていることを前提にしています。これは最初の説明訪問の時からなので、まず本人に説明訪問に伺う了承を取ってもらうことが必要となります。問合せ電話時点で本人に相談そのものを秘匿している場合には、その旨を話すことから始めてもらいますが、ここで家族間コミュニケーションが困難な状況の場合も多いです。そうした場合には、家族間のコミュニケーションをどう取るのかを話し合い、状況が変わることを待ちます。なので、最初の問合せ電話から数か月後に再度連絡が来ることもよくあります。

2、入会后

漂流教室では、訪問スタッフは完全に子どもとの関係作りに専念してもらうため、保護者と訪問スタッフが語り合うことはしないようにしています。保護者の思いは専従スタッフに相談してもらうこととなります。方法としては、電話・メール・ファックス・来所等のような手段でも構いません。また、保護者同士で連絡を取り合い話し合う「漂流マザーズ」という集まりをしている人たちが生まれています。これはスタッフ主導の保護者会ではなく、法人格取得のための話し合いや保護者懇談会をオープンな雰囲気で行う間に、自然と人が繋がっていったものです。漂流教室をずっと利用している保護者が多く、新規で来た人が大変そうな場合には、ピアカウンセリング的な働きを期待して、この集まりを紹介します。

3、訪問そのものが保護者支援となる場合

訪問において、稀に、子どもがスタッフと会わずに自室におりながらも訪問は希望しており保護者とスタッフがする話を聞いているという形態をとることがあります。この場合は専従スタッフが訪問を行い、保護者との話を続けます。九か月に渡ってこの形態の訪問を行い、保護者と日々の何気ない会話を積み重ねていく中で、たまたま当事者の最近買った本の話になり、それを見せてもらうことから顔を合わせた訪問に移行したというケースもありました。

4、子どもが在籍している学校との関係

札幌市教育委員会の見解では、不登校の子どもに対する訪問支援の時間は指導要録上の出席扱いにすることはできないこととなっています。そのため、訪問支援の場合は在籍校に保護者から漂流教室の利用を告げるに留まる場合がほとんどです。ただ、担任或いは管理職等教師個人の人々の関心によっては、状況に関する問い合わせがあります。また、札幌市では2008年に子どもを21歳までの八年間親が監禁していたという事件以降、教育委員会の指導として、不登校の場合教師が必ず安否確認するようになっていました。この際、担任が訪問しても安否が確認できないが漂流教室の訪問は受けているという場合、学校から状況確認の連絡が来ることもあります。

一方、漂流教室のフリースペース「漂着教室」の利用は、出席扱いとすることが認められています（ただし最終的には校長判断のため、稀に出席扱いとしないと言われ交渉することもあります）。利用を開始する際に、保護者から学校に申し出てもらい、学校から漂流教室に確認の連絡が来ます。その後は、在籍校へ毎月一回利用報告を行います。

5、子どもの進路や現在の様子

漂流教室の特徴は、年齢や所属、障害といった

属性に拘らない関係作りにあります。指導的・指示的に関わることをしないという理念は徹底しており、スタッフが利用者の進路について考えて指導・指示をするということはありません。利用者自身から相談された場合に、出来ることを提示し共に何かをすることはあります。こうした関わりを続けて十余年、利用者が様々な進路に進んでいくのを見てきました。小学生時代から利用して高校に行く人、高校から大学に行く人、専門学校に行く人、高卒で働く人、大学を出て働く人、基本的に家で過ごす人などなど。

「フリースクール」としての漂流教室で利用者が学ぶことは何かと言われると、関わり方の方向性からしても答えづらいものがあります。「何かをしたい」と語って子どもたちが始めることは、漂流教室が持っているものではないからです。それは変幻自在千変万化です。漂流教室がやっていることは、学習を指導・指示するという点ではなく、「成長」のための環境調整だと考えます。「成長」の本質は変化であり、それが大人に向かう場合「成長」と呼ぶだけであるとの考えが漂流教室にはあり、訪問でもフリースペースでも変化しやすい関係や居場所を用意することにより、人は「成長」していくと考えています。

その環境として、「指導的指示的に関わらない」「一人で安心して過ごすことができる」「変化が少ない」「自分以外の誰かがいるなどに配慮した関係や居場所」を作ってきました。

こうした中で居場所で「成長」した人の例を一つ挙げてみます。中一でフリースペース「漂着教室」にやってきた A 君は小学校の早い時期からずっと不登校でした。生活保護世帯で過ごしていて社会福祉協議会の人に紹介されて初めて来ました。

当初は早口でガンダムの話だけをする感じだったのは、何とかその場に居られる時間を作りつつ、周囲との距離を測るためだったのかもしれない。後に彼が語ったところでは、寝ている人がいることや行っても勉強しろと言われなことが、居やすさに繋がったそうです。

彼は中学在籍中不登校を続ける一方、居場所にはほぼ毎日通い続け、毎日料理をしたり麻雀・卓球といった遊びを通じて、多くの他の利用者と打ち解けていきました。そんな彼に担任教師が会いに来ることもありました。

中学卒業が近づくにつれ、彼は進学を考えるようになります。選択肢となる学校についてやどんな勉強が必要かの相談は居場所で行われましたが、学習の場は家を中心でした。その後、一般入試で高校に進学した彼は、高校にいる間は居場所にほとんど来なくなります。三年後久しぶりに連絡したところ、大学進学をすると話してくれました。自由になる時間が出来るなら、ボランティアスタッフにならないかと誘いかけ、今度は関わる立場になってもらいました。その後、ボランティアスタッフに留まらず、漂流教室に関わる人々や団体とも繋がって貧困問題や若者の生きづらさに関わる活動に携わり、大学院進学を目指しています。

「ただいる」を大事にした訪問で変化した M ちゃんの例

M ちゃんが漂流教室の利用を始めたのは小学校低学年の時でした。お母さんから電話相談があり、その後 M ちゃんの下承を得てから M ちゃん宅に訪問し、説明・顔合わせとなりました。

お母さんの方から事前に電話で、高機能自閉症の診断を受けていること、不登校になってからは気に入った場所しか出歩かず、また、外出すると頻尿気味になるとの相談を受けていました。顔合わせでは、お互い自己紹介をしました。

その後、M ちゃんは自分の好きな物を次々持ってきて私にひとつずつ見せてくれました。M ちゃんの場合、もともと訪問に対して前向きだったこともあったため、あまり抵抗もなく入会に進んだのだと思います。

漂流教室の訪問は、二人で何か一緒にしてもいいし、逆に、何もしなくてもいいという特徴があります。

何かを一緒にしなくてはいけないといったこともないし、無理に会話をする必要もない。しかし、顔合わせの時や訪問が始まった直後では、利用者は何かしなくては、また、何か話さなくてはと感じる場合が多いです。

漂流教室のボランティアスタッフは、ボランティアになるための研修を 4 回、そして訪問が始まったスタッフには訪問研修を 4 回受けてもらいます。その研修の中で、漂流教室の訪問の在り方を学んで貰うのですが、それでもボランティアスタッフからも、「間が持たない」とか、「何をしたいかわからない」といった声をスタッフミーティングの時に聞くことがありました。

利用者の年齢が低くなるほど、実際に訪問が始まった時に「ただいる」「ただ会う」という状態に困惑することがあります。M ちゃんの場合は、せっかくうちに来てくれたのだから、来た人（客）に何かおもてなしをしなくてはという気持ちがこちらに伝わるほど強くでていました。初めての訪問だった私もまた、頭のどこかに楽しませたいとい

う気持ちがあったと思います。

こうした状態を、今は「サービス期間」だったと思っています。利用者は、週に一度の訪問が楽しくて仕方ない。もっと一緒に話したいし、遊びたい。一方スタッフも「楽しかったな」と思ってしまいます。一見いい雰囲気であった M ちゃんの訪問に見えますが、でもそれは漂流教室の訪問の主体である「ゆっくり関係を築く」とは違っていました。

訪問が始まり、週に一度訪問に行くと、必ず M ちゃんは「おもてなし」をしてくれました。新しい玩具や、描いた絵を見せてくれたり、折った折り紙をみせてくれたりしました。しかしそれもやがて尽きていきます。

三か月ほどたったころ、「今日はなにも見せるものがない」と不安そうに M ちゃんは言いました。そこで始めて、「見せたいものがないなら、無理に探さなくてもいいんだよ」という言葉をかけました。「おもてなし」をしてくれる M ちゃんの意味を否定することは出来なかったし、訪問の最初に物を紹介することで M ちゃん自身が訪問の流れを作っていたかもしれなかったからです。しかし、その言葉を受けて M ちゃんは少しほっとした表情を見せたように感じます。

それからの訪問は、M ちゃんにとって「事前準備」のない、「ただ会う」「ただいる」状態の訪問に変わっていきました。

A ちゃんが 16 歳の頃、学習支援という形で週 1 回 2 時間の訪問が始まりました。今年から通信制高校に入学をしたが、課題が全く解けないので手伝ってほしいという希望でした。

A ちゃんは小学生の頃から不登校で、また、入院していた時期もあり、数学は分数の足し算引き算から、国語は小学 2 年生の所から出来ませんでした。そのせいなのかあまり勉強にやる気が出ない様子で、私が行くと、一応学習道具を準備して一緒に机に向かうのですが、一言も喋らずに 2 時

間過ごすことがほとんどでした。

Mちゃんの訪問と同じころに始まったAちゃんの訪問では、訪問3回目くらいの時に、私とAちゃん二人に共通の話題が見つかりとても話が弾んだ日がありました。帰り際、Aちゃんは「こういう話が出来る人がいなかったからとても嬉しい」と言っていました。それを聞いて私も嬉しく思った記憶があります。しかしそれはとても危ういことだったと後に実感しました。

訪問するうえでスタッフが気を付けなくてはいけないことは、利用者に対して、無条件の肯定的関心を持つことと、自分の前に壁を作ることです。

無条件の肯定的関心とは、その名の通りどんな理由があろうと利用者に対して母親のように無条件に肯定的な関心を向けるということです。また、自分の前に作る壁とは、相手を遮断するものではなく、感情的にならないための盾のようなものです。もし利用者がやっている行動が自分の意に反しているものだったら、もし会話の中で利用者に関心のあるものを否定されたら。そんな時に、自分の前の壁で一度クッションを入れてから自分の中に入れることで感情的に反応することを防いでくれます。無条件の肯定的関心を向けるにはこの壁が必要不可欠だと感じています。

また反対に、利用者と自分も大好きなものが共通していた場合でも、壁があることによって感情的にならないように防いでくれます。Aちゃんの場合、「共通の話題で盛り上がる人」という印象がついてしまったら、この人とはその話しかできないと無意識にAちゃんを感じてしまったり、その話さえすれば場が盛り上がると思ってしまうたり、その話が尽きたときはどうしようと思ったり、2人の間にそれしか共通点がないという印象を持つ恐れが十分ありました。

Mちゃんの訪問が1年を過ぎた頃からMちゃんは週に何度か学校に行くようになりました。また、前までは下校時間になりクラスメイトや近所の子が学校から帰ってくると窓の方ばかりを気にしていましたが、そういった様子も見られなくなりました。

2年たった今では、毎日母親と一緒に学校に行き、今年は運動会・学習発表会にも参加しています。

Aちゃんもまた、訪問が1年半過ぎた頃、それまでやっていた通信制高校の勉強を辞め、新しく漫画・イラストコースのある通信制高校に行くことが決まりました。そこで、いままで家から出たことのなかったAちゃんですが、スクーリングと試験のために一週間学校へ通います。また、祖父母が経営している民宿の手伝いをするようになりました。



フリースクールはどんなところか ～それぞれの実践から

フリースクール全国ネットワーク代表理事
奥地 圭子

I. 日本のフリースクールの概況

(1) フリースクールとその誕生

フリースクールとは学校制度外の子どもの学び場・居場所・活動の場をさし、多くは、不登校の子ども達が活用している。フリースクールという呼称以外に、「フリースペース」「居場所」を使う場合もあり、また、学校外ということでは「家庭」もその概念の中に位置づけて活動している団体もある。「学校外」であれば、学習塾も入るのかと思われる方もあろうが、通常、学習塾はフリースクールには入れない。学習塾は、学校の教育課程が行われていない放課後や土日に開業し、主として学校教育の補完であったり、より成績を上げ進学競争に勝つために通う所であるからである。これに対してフリースクールは、学校の授業が行われている時間と並行して、朝から夕方まで月から金に行われている所が多く、主として学校に行っていない子どもが活用している。

日本の教育は、国が統括する学校教育一本で行われてきた社会であり、このような学校制度外に子どもの通い場所が誕生したのは大きなでき事だったといえる。

その始まりは、日本では1980年代半ば頃からといえる。東京シューレは草分けの一つであるが1985年にスタートしており、この論考を書いている今、満30年を過ぎた。日本のフリースクールの背景には、図(※)のように、不登校の激増がある。そして、2001年には、「NPO法人フリースクール全国ネットワーク」(以下「フリネット」)が誕生、現在約80団体がつながりフリースクールフェスティバルやフリースクールスタッフ養成研修、政策提言など活発に行っている。

(2) 日本のフリースクールの概況

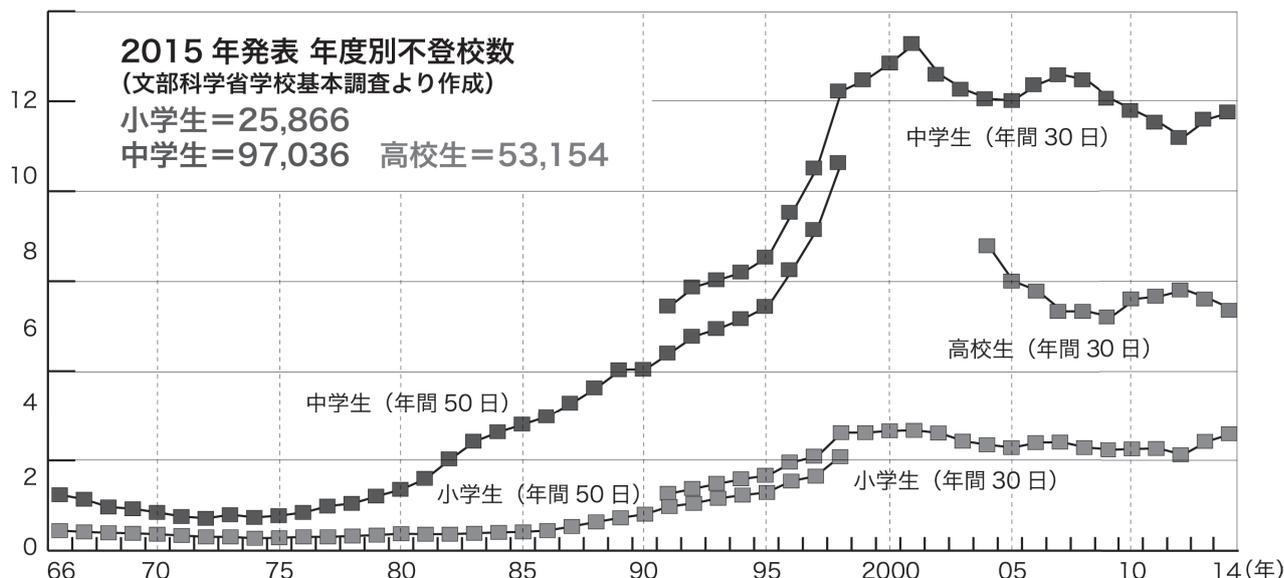
ここでは、2015年3月に文部科学省が行ったフリースクール調査にもとづいて紹介する。これは国として初の調査であり、フリネットも協力して行われた。但し、これは義務教育段階の小中学生がいる団体対象に行われたため、実際のフリースクールには高校年齢の子ども達は数だけ調整された。アンケート送付数は474、回答数319(回収率67%)、在籍する義務教育段階の子どもは約4200人(高校段階以上も含めると約7000人)であった。

団体の形態はNPO法人が最多で46%、法人格をもたない任意団体や個人をあわせても32%で、多くはなんらかの法人格をもつ。

設立時期は1960年代以前も少数あるが最多は2000年～2010年であり、45%を占めている。法人格取得時期もそこが最多でNPO法の成立が1998年であることと関係しよう。その9割は通所型であり、宿泊型は少ない。週当たりの開所日数は、5日が最多で全体の5割強、在籍者数当たりでみると、5人までという小規模団体が最多で約4割、平均は1団体13.2人となった。

スタッフ数は最多は1～5人で全体の6割の団体、1団体あたり有給・週5日以上勤務者は2.8人であった。活動内容は、学習、自然体験、調理、芸術、スポーツ、相談など多岐にわたり、会費(授業料)の平均は3万3000円、施設は民間施設を借用しているところが6割、借料の平均額は、1団体あたり16万7000円であった。公的支援のしくみが無い中で、経営の大変さがみてとれる。

(万人)



(3) 学校制度との関係、そして進路

学校外で息づいて、学校へ行ってない子どもの成長を支えてきたフリースクールであるが、学校制度との橋わたしは古くから2つの点で行われてきた。1992年、国の「学校不適応に関する調査研究協力者会議」がそれまでの問題の子ども、問題の親が登校拒否を引き起こすという考えから認識転換し「誰にでも起こる登校拒否」と発表した際、民間施設に通う日数を学校の出席日数にカウントしてよい、となった。これは校長裁量だが、先述の文科省アンケートによると「出席扱い」となっているのは55.8%である。

もう1点が、出席扱いになるなら、通学定期的ように割引き制度を作って安くフリースクールに通えるようにしたい、と議員さんに向け合ったり、全国署名を集めたりしての運動が実り、1993年に通学定期が使えるようになった。しかしそれは20年以上になる今でも知らなかった、あるいは知っても理解しない校長、教育委員会、鉄道機関があり、トラブったりするのは残念なことである。

そして、一般に、フリースクールで育った子どもの進路はどうなっているであろうか。フリースクールは学校外であるから、親の就学義務との関係で、子どもが学校へ行かなくとも学校に籍を置くしかなく二重籍となっており、卒業は校長裁量である。90年代頃までは、卒業させない校長がいたが、今は学校の出席日数にかかわらず、不登

校であっても全員卒業が認められる時代となってきている。

中学卒業ができれば、本人が自由に進路を創っていけばよいのは、ずっと登校し続け卒業した人と同じである。かなり多くは高校に進学するか高卒認定試験を受け、高校資格をとっている。さらに大学や大学院へ行く者もいる。

また、自分は学校は合わない、好きではない、と学歴にはこだわらず、就労、自営、起業、表現活動、NPO等への参加などしつつ自立への道を歩んだ者もいる。フリースクールにつながった子ども達が、理解あるスタッフや仲間と出会い、安心して過ごせる居場所で落ち着いていき、さまざまな学びや体験をしていく機会に恵まれたことは、自立への大きな力となっている事は経験者が皆語っていることである。

II. フリースクールの実践

ここには8団体のフリースクールが登場する。それぞれの概要を紹介するのは最低限にし、ある一人の子どもが、それぞれのフリースクールでどんな状況で出会い、入会し、どう成長していったか、退会その後はどう歩んでいるのかを記し、フリースクールはどのような実践の場であるのかを、具体的人物を通じて浮びあがらせようとした。学校と違って、8団体あれば8通りのやり方があり、

それぞれの独自性が発揮される。それは、やってくる子ども・若者と共に考え、本人達の興味関心や気持ちを尊重しつつ、場を作っていくため、子どもやスタッフ、地域状況が異なれば異なっていく。そこがよいところだ。

しかし、また、どこかから命令されたわけではないのに、報告を読むと、共通点がいっぱいあることが分かる。そして、その共通点は学校にはないものである。

少し項目別にみてみよう。

① 入会時の状況は

入会時、ほとんどの子どもの状態はいいとはいえない。1人では電車に乗れない、スタッフとも話せないし、そこにいる子どもとも交流できない。またはハチャメチャな態度をとる子もいる。とても緊張していて、一言も発しない子もいれば、親から離れない子もいる。座ったら、といわれても座れない子もいる。

このような状態になっているのも当然で、不登校になるまでに、いじめその他傷ついたり、不登校そのものが理解されず辛い経験になっていて、人が恐かったり、自分に自信が全く失くなっていたりする。しばらくは家族とだけ過ごしていた子どもが、急に複数の見知らぬ子ども達がいる所へ来るわけだから、見学に行くことを決めたからといつても前の日からのプレッシャーや当日の不安や緊張は大変なものがある。

それをフリースクールスタッフは、よく理解しているし、出会いの大切さが分かっているのも、どの団体も、どうしたら安心できる場所と感じてくれるか、その子その子の状況を考えながら、子どもや親に出会っていく。そのやり方やしくみはそれぞれだが、入会は自由であること、入会したかったらどうぞ、というスタンスはどの団体も共通している。とりわけ、子ども自身の意思でなく、周囲の大人のすすめで「フリースクールに来なくてはいけない」とか、自分でも「学校に行けてないから入会しなければならぬ」と思っている場合もあるため、それへの配慮もする。その上で、入会を決めてもらうのである。

② 入会後の様子や子どもとのかかわり

①で述べたように、徹底して、本人の意思の尊重から入会が始まるその連続の日々であるので、どのフリースクールもその子の不安な気持ちや何をどうしたらいいかわからない様子によりそってやっている。そして、無理のない範囲で、自分のやりたいことや他の子がやっている活動に誘う。それは、活動させなければいけない、と考えているのではなく、やりたいと思っているがきっかけがつかめない場合もあり軽く声をかけるのであって、むしろどのフリースクールも「何か話さなくては」とか「何かしなくては」と思わないでいいこともたびたび伝えていっている。何もなくても責められることはない、と分かってきて、子ども達は初めて自分が自由にやっていいんだと感じて来、やりたいことをしていいのだと思えてくるのである。指導や指示ではなく、その子の状況や気持ちにつきあい、ゆっくりやっていく。その間スタッフは、話をよく聴く。子どもにとって分かってもらえたという実感はとても大切である。

③ どんな活動をしているか

ここに記載された10人ほどで見ても、実に多様な活動がなされていることがわかる。工作、テニス、パソコン、学習、フリースクールフェスティバル、実行委員会、ミーティング、料理、麻雀、卓球、ゲーム、就労体験、手芸、写真、バンド、自転車旅行、音楽、ギター、絵、農業、陶芸、木工、英会話、資源回収、宅配花屋、沖縄自転車旅行、ルービックキューブ大会、車椅子を海外へ送るプロジェクト、……実にさまざまな活動をしている。それらの活動は、自分一人でやっているものと、仲間と共にやっているものがある。仲間と共にやるものは、殆どはミーティングが開かれて、話し合っで決めていく。スタッフや職員など大人側が、あれやれ、こうしようとやらせたりするのではなく、子どもがやりたいことを、子どものやりたいやり方ですすめられているのがわかる。

この「ミーティング」は、フリースクールにとって大変大切なもので、自分が思った事を言っているんだ、と感じることから始まり、自分の意見を

聴いてもらったり、提案が通り皆から喜ばれる経験をしたり、等を通して自己存在を尊重されている実感や安心感が得られること、更に異なる意見があつてよく、意見の違いから更に考えを深める話しあいに意味があること、違いを尊重しあう、つまり個々に違ってよく、また少数意見もおそれないでよいこと等を学びあう機会となっている。民主主義が育っていく素地でもあるのである。

やりたいことの実現には、個別性の高いものは一人で、またはスタッフの協力でやっていくが、複数（集団）で取り組みたいものはミーティング以外に「実行委員会」やサークルなどを作って、その目的でつながりながら実らせていくやり方をとったりする所も多い。

そこが自主性、創造性が培われる活動でもあり、達成感や自信、個性の伸長が得られる活動ともなっている。

④ 学校とのかかわり、 親とのかかわり

フリースクールは学校を否定していると勘違いされた事もあったがそれは誤解であり、子どもや保護者がつながっている学校との関係は大事であり、信頼関係のもとにやっつけていこうとしている。出席認知制度もあることから、毎月や毎学期の報告書、安否確認等への協力、受験や卒業上の事柄での対応、相互の来訪などで理解を深める、等を行っている。しかし、子どもや保護者が学校との対応で悩んでいる場合には、子ども側に立って学校側との話し合いを行ない、解決に尽力する場合もある。

親とのかかわりは、フリースクールにとって基本的に重要で、説明会や入会相談から始まり、保護者会、個別相談、訪問しての相談時に子どもと親の間に入って、相互の関係の悪化を食い止めるための話しあいなど、さまざまな形で欠かせない。子どもがフリースクールに入会しても、親の理解がないと、いつまでも苦しさをかかえ、なかなか元気になれない。その理解は、フリースクールがどういう考え方で、どういうやり方をしているかはもちろんであるが、不登校、いじめ、発達障害、進路、学校や教育委員会、行政のしくみ、何より

子どもをどう見るか、など多岐にわたったりする。しかし、フリースクールにつながっていただくことで子どもを受け入れる親に変わる人も多く、また閉鎖性から脱却され、自分も楽になり、子どもを責めなくなり、その後の人生もいい親子関係が続いていく家庭が多い。最近は家庭状況が複雑になり、保護者は親とは限らない・また、フリースクールに単婚家庭や貧困家庭も増えつつあり、福祉的な視点での対応もケースによって行っている。

⑤ 進路について

フリースクールその後は、進学する者もいるし、勤労や、やりたい活動に参加する者、医療にかかりながらゆっくり過ごす者いろいろである。フリースクールにいる時から、学習や仕事体験、インターンなどをサポートし、進路についての相談にのり、あるいは先輩との出会いの機会をつくっている。それぞれの文章を読んでいただくと、進学や社会に出ることの不安や葛藤に、スタッフが、その子その子に寄り添いながら一緒に考えていく姿がよく感じとれると思う。また、フリースクールとかわりながら進学や就労の時期があることのやりやすさもみえると思う。そして共通なのは、フリースクールを退会や卒業をしたら「ハイ、サヨナラ」ではなく、つきあいが続くということであろう。子ども達は、自分の思いやペースで自立への道を歩む力を持っているのがよく分かる。指導や指示ではない関係で、その力は最も発揮される。

おわりに

この冊子は、フリースクールではどのように子どもとかわり、どのように成長へのサポートをしているのかを、ある一人の人物を通して書いたものである。主として不登校の子どもがやってくる所なので、つらい経験をしてきた子も多いが、笑顔が甦る姿に触れ、多くのスタッフがやりがいを感じている。学校教育以外にも多様な学びの在り方が認められ、社会的にも理解と支援が広がり、ますます多くの子の笑顔が増えることを期待したい。この一冊が、フリースクールというものを知っていただく一助になれば幸いである。

フリースクール全国ネットワーク団体一覧

「正会員」と「支援会員」 = (支) の一覧です。

NPO法人訪問と居場所 漂流教室

〒064-0808 北海道札幌市中央区南8条西2丁目市民活動プラザ星園401
電話 050-3544-6448 FAX 050-3544-6448
<http://hyouryu.com/>

NPO法人フリースクール札幌自由が丘学園

〒060-0908 北海道札幌市東区北8条東1丁目3-10
電話 011-743-1267 FAX 011-743-1268
<http://www.sapporo-jg.com/>

スクールさぼーとネットワーク

〒085-0035 北海道釧路市新川町1-7
NPO法人和(なごみ) シッポファーレ!内
電話 0154-32-4080 FAX 0154-32-4089
<http://www.web-p.jp/sukusapo/>

NPO法人アスイク

〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-5-2 大野第2ビル2階
電話 022-781-5576 FAX 022-781-5576
<http://asuiku.org>

NPO法人TEDIC

〒986-0826 宮城県石巻市鑄銭場3-7 牧場ビル3階
電話 050-3154-3377 FAX 022-774-2360
<http://www.tedic.jp/>

NPO法人まきばフリースクール

〒987-2183 宮城県栗原市高清水袖山62-18
電話 0228-25-4481 FAX 0228-25-4482
http://1st.geocities.jp/makibafreeschool/public_html/

NPO法人With優

〒992-0075 山形県米沢市赤芝町字川添1884番地
電話 0238-33-9137 FAX 0238-33-9138
<http://www.with-yu.net/index.html>

NPO法人フリースクールビーンズふくしま

〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
電話 024-529-5184 FAX 024-529-5184
<http://www.k5.dion.ne.jp/~beans-f/>

NPO法人寺子屋方丈舎

〒965-0871 福島県会津若松市栄町2-14 レオクラブ
ガーデンスクエア5階
電話 0242-93-7950 FAX 0242-85-6863
<http://terakoyahoujyousha.com/>

フリースクール青い空(支)

〒964-0074 福島県二本松市岳温泉2-20-11
電話 0243-24-1518 FAX 0243-24-1518
<http://www.adatara-aoisora.com/index.html>

NPO法人越谷らるご フリースクールりんごの木

〒343-0042 埼玉県越谷市千間台東1-2-1 白石ビル2F
電話 0489-70-8881 FAX 0489-70-8882
<http://k-largo.org/>

NPO法人東京シュール

〒114-0021 東京都北区岸町1-9-19 コーエービル
電話 03-5993-3135 FAX 03-5993-3137
<http://www.shure.or.jp/> <http://tokyoshure.jp/>

学校法人三幸学園 東京未来大学 みらいフリースクール

〒120-0005 東京都足立区綾瀬2-30-6-4F
電話 03-5629-3790 FAX 03-5680-6289
<http://freeschool.tokyomirai.ac.jp/>

東京シュール学園 東京シュール葛飾中学校

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩3-25-1
電話 03-5678-8171 FAX 03-5678-8172
<http://www.shuregakuen.ed.jp/> <http://tokyoshure.jp/>

フリースクール僕んち

〒155-0033 東京都世田谷区代田4-32-17 サンハイツB
電話 03-3327-7142 FAX 03-3327-7142
<http://npobokunchi.blogspot.jp/>

人の泉オープンスペース“Be!”

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤1-15-13
電話 03-5300-5581 FAX 03-3321-8651
<http://be-here.org/>

東京YMCA“liby”

〒167-0042 東京都杉並区西荻北1-15-5
電話 03-3397-0521 FAX 03-3397-0523
<http://www.k3.dion.ne.jp/~liby/>

フレネ自由教育 フリースクールジャパンフレネ

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷1-7-2 雑司ヶ谷ビル202号
電話 03-3988-4050 FAX 03-3988-4050
<http://www.jfreinet.com>

フリースクール@なります

〒175-0094 東京都板橋区成増4-31-11(成増幼稚園裏手)
電話 03-6784-1205 FAX 03-6327-4337
<http://www.asahi-net.or.jp/~bx9m-kb/home>

NPO法人文化学習協同ネットワーク フリースペース コスモ

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-14-3
電話 0422-47-8706 FAX 0422-47-8709
<http://www.npobunka.net/fs-cosmo/>

フリースクール多摩川

〒183-0034 東京都府中市住吉町 1-60-10
電話 042-319-0408 FAX 042-319-0408
<http://freeschooltamagawa.net/>

学び場 ほしのたね

東京都町田市(最寄り駅 小田急線 鶴川)
電話 042-860-5515
<http://democraticschoolhoshinotane.web.fc2.com/>

フリースクールJAT

〒260-0034 千葉県千葉市中央区汐見丘町 14-5
電話 043-241-0170 FAX 043-241-0170
<http://www.asahi-net.or.jp/~ru2a-frym/>

フリースクールあおば

〒272-0021 千葉県市川市八幡 3-3-2-J403 グランドターミナルタワー本八幡
電話 047-324-2889 FAX 047-322-3714

NPO法人ネモチば不登校・ひきこもりネットワーク フリースクールネモ

〒275-0012 千葉県習志野市本大久保 3-8-14 - 401
電話 047-411-5159 <http://nponemo.net/>

アトリエ・ゆう(支)

電話 048-658-2552 FAX 048-658-2552

フリースクールみらいのつぼみ(支)

〒105-0014 東京都港区芝 1-5-9 住友不動産芝ビル 2号館 5階(事務局 全国 web カウンセリング協議会内)
電話 03-6865-1911 FAX 03-6865-1918
tubomi@kyousei-kyouiku.or.jp

フリースクール恵友学園(支)

〒110-0015 東京都台東区東上野 5-11-9 上野奉英ビル 1F
電話 03-5246-6730 FAX 03-5246-6740
<http://kugakuen.com/>

フリースクール「フェルマータ」(支)

〒164-0001 東京都中野区中野 3-19-2 ディアコート 1F
電話 03-6382-5304 FAX 03-6382-5304
http://island.geocities.jp/free_school_fermata/

心理相談室サウダージ(支)

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北 3-25-25 天名家ビル 204
電話 03-5364-9082 FAX 03-5364-9082
<http://www.saudade.biz/>

友だちひろば なゆた(支)

〒177-0041 東京都練馬区石神井町 1-24-6 原田ビル 3F
電話 03-3997-9324 FAX 03-3997-9324
<http://hanakuruma.net/なゆた.html>

寺子屋一休(支)

〒191-0016 東京都日野市神明 3-25-1 第2コーポ小山 201 他、千葉県印西市、群馬県太田市
電話 080-3423-3703
<http://sougakuken.jimdo.com/>

フリースクール興学社(支)

〒270-0034 千葉県松戸市新松戸 4-35 興学社学園新松戸ビル
電話 047-309-7715 FAX 047-348-9191
<http://kgs-ed.jimdo.com/>

共育ステーション 地球の家(支)

〒271-0076 千葉県松戸市小根本 45-12
ありがとう早稲田ビル 1階(活動場所)
<http://chikyunoie.jp/>

我孫子学院リベロ(支)

〒270-1151 千葉県我孫子市本町 1-6-12 本町ビル1F
電話 047-7184-8434
<http://abikogakuin.main.jp/libero/>

NPO法人フリースペースたまりば(支)

〒213-0022 神奈川県川崎市高津区千年 435-10(法人事務所)
電話 044-833-7562 (法人事務所)
044-850-2055 (フリースペースえん)
FAX 044-833-7534
<http://www.tamariba.org>

一般社団法人葵学園

〒940-0062 新潟県長岡市大手通1丁目4-12(都屋ビル2.3F) 電話 0120-69-1900
<http://www.medical-heart.com/aoitop.html>

NPO法人フリースクールP&T新潟校

〒956-0114 新潟県新潟市秋葉区天ヶ沢 253 番地
電話 0250-25-7353 FAX 0250-25-7353
<http://www.pandt.or.jp/>

フリースクールWILLBE

〒910-0006 福井県福井市中央 1-18-3 村田ビル 3F
電話 0776-25-3261 FAX 0776-43-0085
<http://willbe-hs.com/>

NPO法人子どもサポートチームすわ

〒392-0015 長野県諏訪市中洲上金子 2843
電話 0266-58-5678 FAX 0266-58-5678
<http://supportsuwa.jp/>

NPO法人ドリーム・フィールド

〒435-0013 静岡県浜松市東区天竜川町 201
電話 053-422-5203 FAX 053-453-9663
<http://www.n-pocket.sakura.ne.jp/kobo-Released/kirakira/d-field/>

フリースクール アサンテ

〒444-0011 愛知県岡崎市欠町三田田北通 21-22
電話 0564-21-0923 FAX 0564-21-0923
<http://free-school-asante.jimdo.com/>

NPO法人国際フリースクールI CAN

〒943-0823 新潟県上越市高土町 1-8-10
電話 025-524-0173 FAX 025-524-0173
<http://www.freeschoolican.com>

NPO法人登校拒否の居場所づくりの会「こどものフリースペースにいがた」(支)

〒950-0123 新潟県新潟市江南区亀田水道町 1-1-32
電話 090-4707-2203

フリースクールみんなの広場(支)

〒910-0003 福井県福井市松本 3-9-25
電話 080-8699-9876
<http://hirobaufukui.jimdo.com/>

フリースペースIMA(支)

〒910-0004 福井県福井市宝永 2-12-35
電話 0776-59-3239 FAX 0776-59-3239
<http://space.geocities.jp/freespaceima/>

大橋みなと学園(支)

〒389-0604 長野県埴科郡坂城町網掛 305-1
電話 0268-82-7743 FAX 0268-82-7714
<http://www.minagaku.net/>

不登校の子どもの居場所「ひなたぼっこ」(支)

〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下條 1237-3
日野春學舎 2階 (旧日野春小学校内)
電話 090-4024-2955 (代表 西岡)
<http://hinatabokko78.jimdo.com>

フリースクール川川(支)

〒447-0835 愛知県碧南市宮町 3-26
電話 0566-41-8589 FAX 0556-41-8589

ゆいまーる学園(支)

〒466-0064 愛知県名古屋市中区鶴舞 3-4-3 富田ビル 2F
電話 052-732-0180 <http://yuima.jp/>

デモクラティックスクールまんじえ(支)

〒491-0813 愛知県一宮市千秋町屋字東沼 24-13
電話 0586-75-5338 FAX 0586-75-5338
<http://manje.jimdo.com/>

NPO法人フリースクール三重シューレ

〒514-0006 三重県津市広明町 328 津ビル
電話 059-213-1115 FAX 059-213-1116
<http://www.mienoko.com/>

NPO法人フリースクールみなも

〒530-0044 大阪府大阪市北区東天満 1-4-3
電話 06-6881-0803 FAX 06-6881-0803
http://homepage2.nifty.com/freeschool_minamo/

近畿自由学院

〒536-0014 大阪府大阪市城東区鴨野西 1-17-19
電話 06-6925-3535
http://www.occn.zaq.ne.jp/osaka_schole/

NPO法人フォロ

〒540-0025 大阪府大阪市中央区船越町 1-5-1 サンゼンハイツ 1F
電話 06-6946-1507 FAX 06-6946-1577
<http://www.foro.jp/>

NPO法人夢街道国際交流子ども館

〒619-1152 京都府木津川市加茂町里新戸 114
電話 0774-76-0129 FAX 0774-76-0129
<http://www.yumekaido-kodomokan.org/>

神戸フリースクール

〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通 8-8-10
電話 078-366-0333 FAX 078-366-0333
<http://www.freeschool.jp/kfs/>

NPO法人ふぉーらいふ フリースクールForLife

〒655-0034 兵庫県神戸市垂水区仲田 2-1-32
電話 078-706-6186 FAX 078-706-6186
<http://www3.to/forlife>

不登校支援NPOいまじん

〒676-0825 兵庫県高砂市阿弥陀町北池 23-11
電話 079-447-9508 FAX 079-447-9508
<http://npo-imagine.blog.eonet.jp/>

志塾フリースクール ラヴニール(支)

〒544-0023 大阪府大阪市生野区林寺 2-25-24
電話 06-7181-5549
<http://www.lavenir-2010.sakura.ne.jp/>

バンクーバー高等学院フリースクール スペースカナダ(支)

〒550-0002 大阪府大阪市西区江戸堀 1-10-26 江戸堀コダマビル ヒラタ・アンド・アソシエイツ株式会社内
電話 06-6225-2645 FAX 06-6225-2646
<http://www.tsushinschool.ca/>

NPO法人箕面子どもの森学園(支)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西 6-15-31
電話 072-735-7676
<http://kodomonono-mori.com/>

訪問型フリースクール「ツナグ」(支)

〒574-0031 大阪府大東市川中新町 7-302
電話 072-871-0348 FAX 072-871-0348

結空間(支)

〒584-0093 大阪府富田林市本町 13-2
電話 0721-25-5132 FAX 0721-25-5132
<http://www.h6.dion.ne.jp/~yuispace>

アウラ学びの森 知誠館(支)

〒621-0846 京都府亀岡市南つづじヶ丘大葉台 2-44-9
電話 0771-29-5588 FAX 0771-29-5805
<http://www.tiseikan.com/>

聖母の小さな学校(支)

〒624-0912 京都府舞鶴市上安 1697-1
電話 0773-77-0579 FAX 0773-77-0579
<http://www.kyoto.catholic.jp/hp/seiboLS/indexa.html>

フリースペースSAKIWAI(支)

〒630-8114 奈良県奈良市芝辻町 2-11-16 圭真ビル 401
電話 0742-34-4867 FAX 0742-34-4867
<http://www.ac.auone-net.jp/~sakiwai/>

デモクラティックスクールまっくらくろすけ(支)

〒679-2324 兵庫県神崎郡市川町坂戸 592
電話 0790-26-1129 FAX 0790-26-1129
<http://www.geocities.jp/makkurohp/>

**NPO法人コミュニティーリーダーひゅーるぼん
心と居場所支援プログラム「じゃんけんぼん」**

〒731-0102 広島県広島市安佐南区川内 6-28-15
電話 082-831-6888 FAX 082-831-6889
<http://www.hullpong.jp/HPWEBTOP.html>

NPO法人Nest(旧フリースクール下関)

〒751-0832 山口県下関市生野町 2-27-7-4F
電話 0832-55-1026 FAX 0832-55-1026
<http://www.nest-fs.sakura.ne.jp/>

NPO法人フリースクールAUC

〒753-0033 山口県山口市桜島 4-3-21
電話 083-928-6339 FAX 083-928-6339
<http://auc.daa.jp/fs/>

フリースクール「ヒューマン・ハーバー」

〒761-8064 香川県高松市上之町 3-3-7
電話 090-7623-6496 FAX 087-865-0157
<http://human-harbor.jp/>

NPO法人フリースクール木のねっこ(支)

〒731-3362 広島県広島市安佐北区安佐町久地下宇賀 7647
電話 090-8609-0320
<http://kinoko.xyz/>

スクールピア(支)

〒736-0061 広島県安芸郡海田町上市 7-28
電話 082-516-7011 FAX 082-516-7012
<http://peer-hiroshima.com/>

NPO法人箱崎自由学舎ESPERANZA

〒812-0053 福岡県福岡市東区箱崎 3-18-8
電話 092-643-8615 FAX 092-643-8625
<http://www.esperanzahp.jp/>

子どもの居場所 ハッピービバーク

〒840-0023 佐賀県佐賀市水ヶ江 6-5-35 親の会ほっとケーキ内 電話 0952-60-3277 FAX 0952-60-3277
http://www1.bbq.jp/hp_hotcake/

NPO法人フリースクール クレイン・ハーバー

〒852-8156 長崎県長崎市赤迫1丁目4番16号コーポ
ヒロイン6F 電話 095-844-8899 FAX 095-844-8799
<http://www1.bbq.jp/craneharbor/>

NPO法人フリースクール地球子屋

〒862-0956 熊本県熊本市中央区水前寺公園 4-20 水
前寺椿ビル 201号室
電話 096-385-2930 FAX 096-385-2930
<http://terakko.org/>

NPO法人珊瑚舎スコーレ

〒900-0022 沖縄県那覇市樋川 1-28-1 知念ビル 3F
電話 098-836-9011 FAX 098-836-9070
<http://www.sangosya.com/frame.htm>

**子どもの学びと育ちの場000terra coya
空(KUHくう)(支)**

〒873-0023 大分県南杵築市鴨川 936
電話 080-5804-0639

=====

フリースクール等における
在宅支援を含めた個別支援の実践事例報告集

発行日：2016年2月5日

編集・発行：NPO 法人フリースクール全国ネットワーク

〒114-0021 東京都北区岸町1-9-19

Tel / Fax 03-5924-0525

Email info@freeschoolnetwork.jp

Web <http://freeschoolnetwork.jp>

編集協力：ツナガルラボ

=====

※この冊子は、文部科学省平成27年度いじめ対策等生徒指導推進事業「フリースクールにおける在宅支援を含めた個別支援の実践交流研修事業」の一環として作成されました。